にちぎん

2022 NO.70 夏

インタビュー　扉を開く

隈 研吾 建築家／東京大学特別教授・名誉教授

偉ぶらない建築をつくる

地域の底力

岐阜県恵那市

ふるさとへの愛と誇りが導く岐阜県恵那市のまちづくり

対談　守・破・創

飯森範親 指揮者

雨宮正佳 日本銀行副総裁

コロナ禍が教えた文化芸術活動の大切さと
指揮者が多様な奏者を束ねる方法

エッセイ　“おかね”を語る

原田ひ香 小説家　お金と小説

お金と小説

原田ひ香

絵・江口修平

以前、とあるテレビ番組でお金の成り立ち、つまり、お金や貨幣というものがどうやってできたのか、というドキュメンタリー番組を観た。

まずは物々交換の時期があり、次に、米や小麦を単位にして品物をやりとりした。米や麦は、物々交換に比べたら日持ちもするし、単位も小さく、ずっと使いやすいものであったけれど、やはり、古くなって劣化したり場所を取ったりする。その後、米や麦の代わりになるものとして、最初の貨幣、金や銀のコインが生まれた、という話だった。

誰もが知っている貨幣経済の成り立ちではあるが、その番組を観ていて大変印象に残ったのが、コインが生まれたことによって、人々に大きな余裕が生まれたという話だった。物々交換していた食べ物と違って、コインは置いておいたり、貯めたりすることができ、ただただ日々の食事の確保に追われるだけだった生活から、それ以外の時間ができた。分業も可能となり、社会はこれまでとは比べものにならないほど、大きく発展し、変化した。

その時私は、お金というものがなければ小説家という職業もなかっただろうと思った。完全に自給自足をしていたり、物々交換をしている時代には、小説を書いて日々の糧を得る方法はなかったし、そもそも小説を書いたり読んだりすることさえ思いつかなかったはずだ。

それからお金の見方が変わった。

ただ単に、小説を書いてお金をもらう、という関係から、お金がなかったら、小説もないし、小説家もありえなかったとする、もう一歩踏み込んだ関係だ。

さらに最近、私はお金を「労働と労働を交換するもの」だと気づかされた。

例えば、私が家を誰かに造ってもらって、代わりに私の原稿をあげます、と言ったら、工務店の方は驚くし、困るだけだろう。だけど、出るところに出れば、この紙に書いた文字は多少の価値を生む。私が原稿を出版社に渡し、それが本になって書店に並べば、買ってくださる方がいる。そこから私はお金をもらって、工務店の人に支払うことができる。なんて、ありがたいことだろう。

一説に、日本の最初の専業作家、つまり、作家だけで食べていた人は井原西鶴らしい。それ以前は、紫式部も清少納言も宮中の女房として働く傍ら小説やエッセイを書く、兼業作家だった。井原西鶴が専業作家になれたのは、それだけ人口が増え、字を読める人が増え、芝居を観て楽しめる人たちがたくさん現れたおかげだ。

やはり、経済と人口と小説は切っても切れない縁がある。日々、お金に感謝し……と言うとまるでお金のことばかり考えている守銭奴のように聞こえるかもしれないが、私は「お金」というシステムそのものに感謝したい。

はらだ・ひか●小説家。神奈川県生まれ。2005年「リトルプリンセス２号」で第34回NHK創作ラジオドラマ大賞受賞。07年『はじまらないティータイム』で第31回すばる文学賞受賞。他の著書に「三人屋」「ランチ酒」シリーズ、『東京ロンダリング』『母親ウエスタン』『一橋桐子（76）の犯罪日記』『口福のレシピ』『三千円の使いかた』『DRY』『母親からの小包はなんでこんなにダサいのか』など多数。

撮影：喜多剛士

にちぎん

SUMMER 2022　NO.70

CONTENTS

2　エッセイ／“おかね”を語る
お金と小説　小説家　原田ひ香

4　インタビュー／扉を開く
隈 研吾　建築家／東京大学特別教授・名誉教授
偉ぶらない建築をつくる

10　対談／守・破・創
飯森範親　指揮者
雨宮正佳　日本銀行副総裁
コロナ禍が教えた文化芸術活動の大切さと
指揮者が多様な奏者を束ねる方法

14　日本銀行のレポートから（1）
「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）―2022年4月―

16　地域の底力――岐阜県恵那市
ふるさとへの愛と誇りが導く岐阜県恵那市のまちづくり

23　FOCUS → BOJ ㊵ 日本銀行決済機構局 決済システム課デジタル通貨グループの仕事
未来を見据え中央銀行デジタル通貨の検討に尽力

27　日本銀行のレポートから（2）
「金融システムレポート」―2022年4月―

33　トピックス
中央銀行デジタル通貨に関する実証実験（概念実証フェーズ2）を開始 ほか

35　AIR MAIL from New York
ニューヨークの緑

※取材は感染対策を徹底して実施しています。
本誌は6月3日（金）までの情報をもとに掲載しています。

表紙のことば

表紙の店舗は、日本銀行函館支店の三代目店舗（一九五四年の増改築後）です。大正十五年（一九二六）に末広町一番地に建設され、現店舗のある東雲町（しののめちょう）に昭和六十三年（一九八八）に移転するまで、六〇年以上もの間使用されました。

三代目店舗の建設にあたっては、関東大震災（一九二三年）の経験を踏まえ、当時日本銀行の建設でも主流であった耐震・耐火構造の鉄筋コンクリート造りの建物となりました。

三代目店舗にて営業中の昭和四十三年（一九六八）七月には、函館市志海苔町（しのりちょう）の道路拡幅工事現場において、三つの大甕（かめ）とそこに詰められた三七万四千枚もの大量の古銭が地中から発見されました。これらの古銭は市立函館博物館に運び込まれ、当時の日本銀行函館支店職員も約半年にわたり、休日に古銭の洗浄と整理の作業にあたりました。また、銭種の分類などについては、日本銀行本店の職員も手伝いにあたりました。

そして現在、この三代目店舗は「函館市北方民族資料館」として利用されています。日本銀行の現存する支店で二番目に長い歴史を持つ函館支店は、今後も地元とともに歩みを続けてまいります。

表紙・画　北村公司

扉を開く INTERVIEW

隈 研吾

KUMA Kengo

建築家／東京大学特別教授・名誉教授

日本建築界の第一人者で、東京二〇二〇オリンピック・パラリンピック競技大会のメイン会場となった国立競技場の設計にも携わった隈研吾さん。その原点は、一〇歳の時に感動した巨大な近代建築でした。しかし建築家への道を歩む中で、工業化社会における鉄やコンクリートを使う建築ではなく、環境と調和する穏やかな建築を目指すようになりました。どのような転機があったのでしょうか。これからの時代にふさわしい建築について語っていただきました。

偉ぶらない建築をつくる

少年時代に衝撃を受けた東京五輪の巨大建築

――一九六四年の東京五輪の時に見た「国立代々木競技場」が建築家を目指したきっかけだと著書で書いておられます。それから半世紀以上を経た二度目の東京五輪では「国立競技場」の設計に携わられました。

隈　不思議な縁を感じますね。最初の東京五輪の頃、僕は横浜と東京の間の大倉山というところに住んでいました。自宅は木造のぼろい平屋で、遊び場は近くに広がる田んぼだったんです。ザリガニ捕りをしていた田んぼの中に、五輪開催に向けて新幹線の高架を支える大きな橋脚（きょうきゃく）が建てられ、新しい駅（新横浜駅）もできた。それはある種のショッキングな体験でした。まだ木造の低い建物しかなかった時代に、巨大構造物が建ち上がっていくその過程を、一番多感な頃に眺めていたのです。

――感動を与えた当時の国立代々木競技場は、丹下（たんげ）健三さん（注1）の設計でした。

隈　小学四年生、一〇歳でした。僕は丹下さんの巨大な競技場に出会う前から、当時の現代建築を見て回っていました。上野の東京文化会館とか渋谷にあった児童会館とか、デザインや建築が好きだった父親に連れられて。でも、それらには代々木競技場の天に届くような高さが感じられませんでした。四角い箱のような建築が目立つ中で、丹下さんの競技場には曲面も使われている。その造形力に圧倒されたし、競技場の室内空間も天から光が降り注ぐように設計されていて、また圧倒されました。「こんなものを人間がつくれるんだ」と、近代化のパワーを表象する建築に驚愕（きょうがく）したわけです。

だけど、僕が思春期を迎えるにつれて、その時の熱はすーっと冷めていったんです。六四年以降の日本は公害や環境問題が深刻化しました。建築家の夢は消えなかったけれども、近代化や工業化というものに対しては、やばいなと思い始めたのです。

――丹下さんに続く世代の建築家である黒川紀章（きしょう）さん（注2）にも影響を受けた時期があると伺いました。

（注1）丹下健三
一九一三～二〇〇五年。日本建築界の巨匠。戦後日本の近代建築を世界的レベルに引き上げた。代表作に国立代々木競技場、広島平和記念資料館、新東京都庁舎など。

（注2）黒川紀章
一九三四～二〇〇七年。メタボリズム論を提唱し、新陳代謝して生まれ変わっていく生物の原理に建築家は学べと主張した。代表作に国立新美術館など。

取材・文　小堂敏郎
写真　野瀬勝一

隈　中学生の頃、黒川さんの本が書店にずらりと並んでいました。黒川さんは、これまでの建築は西欧的・機械的原理であり、これからはアジア的・生物的原理でなければならないと、反近代のデザインを主張していて、僕は夢中になって読みました。でも、七〇年の大阪万博で黒川さんのカプセル建築（東芝ＩＨＩ館）を見に行ったら、まるで鉄の怪物みたいだったんです。これって超近代だ、言ってることとやってることが違うと思って、黒川さんへの熱も冷めました。大学に入る頃には、黒川さんや丹下さんの建築はこれからの時代に合っていないのではないかと感じていました。

――大学から大学院に進学する際、変わり者の建築家という評判の原広司さん（注3）の研究室を選択されました。

隈　原研究室では世界中の辺境で集落調査を行っていました。原始的・離散的なものに関心を寄せ、近代から一番ひねくれている方向を見ている建築家でした。僕も集落調査に参加することで、自分の求めるものが見つかるかもしれないと期待したんです。未開の集落の離散性を追究して、そこで得たものを自分の建築につなげられるか、全然わからなかったけれども、丹下さんや黒川さんのやり方にはない手掛かりを直感的に感じてはいました。

――大学院修了後、ニューヨークに留学されますが、そこで日本の伝統建築の魅力に気づいたということも書いておられます。

隈　工業化社会とつながるような近代建築が苦手になっていたので、どこか不真面目な感じもするニューヨークのアール・デコ建築に惹（ひ）かれて留学しました。

建築家が偉そうにふるまえる時代は終わった

――今や隈さんは「和の大家」と呼ばれます。ただ、隈さんの建築は周囲から浮かび上がった感じがしません。例えば東京・池袋の豊島区新庁舎が入る複合施設（としまエコミューゼタウン）は、そびえ立つ六本木ヒルズとは異なり、周囲になじんでいます。

隈　自然素材や陰の使い方のせいで、そう感じられるのでしょう。六本木ヒルズはピカピカした建築で、陰がありません。僕の建築は陰がいっぱいできるように設計してあるんです。これは日本建築の昔からのお家芸ですが、屋根の下に陰や木漏れ日ができるようにすると、周りに溶け込むような建築になります。

――フランク・ロイド・ライト（注4）と隈さんの建築には通底しているものがある気がします。

隈　まさにそれは当たっていますね。ライトは日本建築をすごく勉強しました。軒が深く出た日本の建築に出会って、ライトも軒を出すスタイルを始めたんです。陰も大事にしていました。ライトは近代的な感性で日本というものの中に現代性を発見した建築家でしたが、それは今僕

（注3）原広司
一九三六年生まれ。建築家、東京大学名誉教授。代表作に梅田スカイビル、京都駅ビルなど。

（注4）フランク・ロイド・ライト
一八六七～一九五九年。二〇世紀のアメリカを代表する建築家。自然との融和を目指す「有機的建築」を提唱した。岡倉天心著の『茶の本』に影響を受けたとされる。日本でも旧帝国ホテルなどを設計した。

くま・けんご●1954年生まれ。64年東京オリンピック時に見た丹下健三の国立代々木競技場に衝撃を受け、幼少期より建築家を目指す。大学では、原広司、内田祥哉（よしちか）に師事し、大学院時代に、アフリカのサハラ砂漠を横断し、集落の調査を行い、集落の美と力に目覚める。コロンビア大学客員研究員を経て、90年、隈研吾建築都市設計事務所を設立。東京大学教授を経て、現在、東京大学特別教授・名誉教授。これまで30カ国を超える国々で建築を設計し、日本建築学会賞、フィンランドより国際木の建築賞、イタリアより国際石の建築賞など、国内外でさまざまな賞を受賞。主な著書に『点・線・面』（岩波書店）、『ひとの住処』（新潮新書）、『負ける建築』（岩波書店）、『自然な建築』『小さな建築』（岩波新書）、他多数。

がやろうとしていることと同じです。

――八六年に自らの設計事務所を始められましたが、これまでずっと順調だったわけではなく、九〇年代には仕事の依頼が全然なかったと伺いました。

隈　本当に一〇年間、東京で一つも建築をつくることができなかったんです。バブルが弾けた後、デザインの面白いものをつくろうなんていう空気もなくなっていました。だけど、そんな苦節一〇年の時期に僕は地域の建築に携わるようになりました。その地域の職人さんたちの話を聞き続けて、新しい材料とかやり方を学ぶことができたんです。

東京の仕事では、建築家の僕が職人さんと直接話をしたくても、ゼネコンの現場所長が許してくれませんでした。「工程と予算のコントロールがきかなくなる」という理由で。ところが、仕事で現場に行ってみると、違う時間が流れていました。本当にいろんなことを学べたんです。

――スケッチや図面を描いて送るだけで、現場には足を運ばない建築家も少なくないと聞きます。隈さんの姿勢はそれとは対照的です。

隈　小学生の頃から自宅の増改築を手伝っていたんです。もともと小さい家だったから、僕や妹が成長して大きくなると手狭になってきた。そこで家族みんなで間取りを考えたり、部屋を増築したり、毎年少しずつ手を入れていました。最後の仕上げは父親の担当なのですが、僕はその手伝いで塗装とか床張りとか、天井までやったこともあるんです。材料を買ってきてスクリュービスで留めて。そのうち工事や材料のことにも興味を持つようになりましたね。

――建築家というと、近寄り難いアーティストといったイメージもありますが、これまでのお話から隈研吾さんという建築家像にはそんな印象を持ちません。

隈　もともと建築家というのは西欧では権威の象徴で、王様の脇でふんぞり返っていたんです。街の建築はつくらず、権力者に寄り添って宮殿を建てたり、国家や都市のイメージをつくったりする。そういう西欧の伝統が明治期の日本に入ってきたんです。それまで日本には建築家という職業すらなかったわけですが、偉そうにふるまうということまで西欧から学んでしまいました。そのうえ、戦後の高度成長期には建設会社が建築家をもてはやしました。建築家から仕事をもらおうと思って。

いわゆるハコモノの時代に活躍した、僕らの上の世代の建築家は、総じて偉そうな感じの人が多かったと思います。建設会社に徹底的にヨイショされて神さまのようにふるまい、九〇年代になってもそのまま偉そうにしていました。しかし僕は建築家がそうしていたらピンチを招くと思った。バブルが弾けて仕事は少なくなってきたのに、まだ偉そうにしている建築家は滑稽にすら見えました。

九〇年代以降、建築が成長を牽引（けんいん）するような時代は終わっていきました。二〇〇〇年代になると、社会の建築を見る目が厳しくなってきた。大きな高いビルは太陽の光を遮る悪者です。

僕らの世代はそういう時代から建築家として仕事を始めたんです。高度成長期の時のような偉そうな態度をしていたら笑われるだけですから、僕は逆に、地面に這いつくばる感じで行かなくちゃいけない。地域の人たちともそういうふうに接して、彼らからいっぱい学ぶべきだと思ったのです。

国立競技場に用いた日本伝統の「細い木」

――国立競技場の設計をめぐっては、第一回のコンペで選ばれた案がキャンセルされ、第二回のコンペで隈さんの案が選ばれました。

隈　第一回のコンペは応募要項がものすごく厳しくて、僕はお呼びじゃないんだなと思いました。超大御所の建築家か、巨大競技場の設計実績のある超大手設計事務所しか応募できないようなコンペだったんです。ただ、選ばれた案を見た時、これは神宮外苑の森の中には合わないと感じました。森が主役であるべきなのに建築のほうが主役然としていたからです。

――隈さんの国立競技場は軒庇に日本全国の木材が使用され、ほかにも随所に木があしらわれています。第二回のコンペの審査では環境的な設計も重視されたそうですが、隈さんは以前から環境に優しい木を重要な素材として使ってきました。

隈　僕が最初に木を使ったのは高知県檮原町の「雲の上のホテル」で、一九九二年頃にできているんですね。僕の家が増改築できたのも木造だったからですが、檮原で木の柔軟性に改めて気づき、こんなに面白い素材なんだと実感しました。木を使うだけで空間を変えることもできます。ペットが一匹いるだけで場も和むように、木は生き物としての不思議な力を持っています。

――国立競技場の設計では、一〇五角という寸法の安価な木を活用されたそうですが、どのようなお考えからでしょうか。

隈　日本の木造は世界で一番洗練され、しかも経済的で、細い木をうまく組み合わせて強い建築をつくってきたわけです。一〇五角の小径木は日本で一番使われている規格材で、住宅の柱でもなじみがあるはずです。組み合わせると強くて繊細なフォルムができるし、しかも一〇五角のような小径木は、間伐材を積極的に利用する日本の木材生産・循環システムの中心にあります。そんな日本独特のものを用いて競技場をつくりたかったのです。

――新型コロナウイルス感染症の影響で日本人の生き方や暮らし方が大きく変わりつつありますが、建築については今後、ど

高知県檮原町にある、隈氏設計の「雲の上の図書館」　（写真提供：川澄・小林研二写真事務所）

隈氏が設計に携わった「国立競技場」（写真提供：独立行政法人日本スポーツ振興センター）

国立競技場の最上部を一周するようにつくられた「風の大庇」（写真提供:独立行政法人日本スポーツ振興センター）

のような方向に向かっていくでしょうか。

隈 「超高層モデル」はコロナ禍をきっかけに終わると思います。大都市の超高層ビルに働く人々を集め、生産効率を上げるモデルですが、これは工業化社会にふさわしい効率的建築様式だと言うこともできます。二〇世紀初頭にアメリカで工業化が進み、工場に労働者を詰め込んで働かせる仕組みが生まれました。それが現代の超高層ビルにもつながり、効率的建築は世界中でコピーされ続けてきたのです。でも、二〇世紀後半にはナンセンスなモデルになりました。情報技術の進展で、どこにいても仕事ができるようになり、大都市のビルに集まる必要はなくなったからです。なのに、依然として超高層モデルをつくり続けていた。そこに新型コロナがやってきた。人間の怠慢が感染拡大の一つの原因だと思うんです。

だから、どうやって超高層ビルを出るかが、これからの課題です。大都市から逃げたいという声も聞かれているようです。離れても仕事ができる情報技術を僕らはもう手に入れているわけですから、街づくりや建築のほうが遅れているということです。

若い世代の建築家の中に面白いことをやっている人がたくさんでてきました。僕の上の世代の建築家とは大きなギャップを感じていましたが、工業化社会の後の若い世代との間にはあまり感じません。都市からの出方とか自然への出方とか、若い建築家はそれぞれに楽しんで取り組んでいる感じがします。自分で小さな事業まで手がける建築家も増えています。建築実業家なんて名乗る人がいたりするし、そういうたくましさのある若手がこの先の建築を担うことになればと思いますね。

――本日は、ありがとうございました。

（聞き手／情報サービス局長（取材当時）渡邉昌一）

対談 守破創

ドイツを中心に世界の舞台で活躍する指揮者で、日本では山形交響楽団など地域オーケストラの発展にも尽力している飯森範親氏。コロナ禍のもとでどのような苦労があったのか。個性あふれる専門家集団をタクト（指揮棒）一本でどう束ねるのか。青年時代に指揮者を夢見た雨宮正佳副総裁と「生きた音楽を奏でる組織論」を考察し、日本人が西洋音楽に向き合う意義も真摯に問い直す。

コロナ禍が教えた文化芸術活動の大切さと指揮者が多様な奏者を束ねる方法

日本銀行副総裁

雨宮正佳

AMAMIYA Masayoshi

1955年東京都生まれ。79年東京大学経済学部卒業後、日本銀行入行。98年企画室企画第2課長、同年金融市場局金融市場課長、99年企画室企画第1課長、2001年同参事役、02年考査局参事役、04年政策委員会室審議役（組織運営調整）、06年企画局長、10年日本銀行理事（12年～13年大阪支店長嘱託）、14年日本銀行理事再任、18年3月日本銀行副総裁就任。

指揮者

飯森範親

IIMORI Norichika

1963年神奈川県鎌倉市生まれ。桐朋学園大学指揮科卒業。ベルリン、ミュンヘンで研鑽を積み、2001年にドイツ・ヴュルテンベルク・フィルハーモニー管弦楽団音楽総監督に就任（現在は首席客演指揮者）。国内では1994年に東京交響楽団の専属指揮者となり、正指揮者、特別客演指揮者を歴任。現在、パシフィックフィルハーモニア東京音楽監督、日本センチュリー交響楽団首席指揮者、山形交響楽団桂冠指揮者、いずみシンフォニエッタ大阪常任指揮者、東京佼成ウインドオーケストラ首席客演指揮者、中部フィルハーモニー交響楽団首席客演指揮者。23年4月より群馬交響楽団常任指揮者に就任予定。

苦境の中で得られた音楽の喜びと演奏活動の新たな道

雨宮　飯森さんとは、あるサロンコンサートでご縁をいただきました。毎回、飯森さんによる楽曲紹介のトークと若手音楽家の演奏、それから食事会もあって大変楽しい集いでしたが、残念ながらこの二年ほどは自粛中です。コロナ禍が長引く中での文化芸術活動には、やはりご苦労が多いかと思います。

飯森　二〇二〇年の春は二カ月半ほど例外なく演奏活動ができなくなりました。二年以上経った現在もまだまだ感染者が多い状況ですけれども、ウィズコロナでの新たな活動の形を関係者みんなでずっと考え続けています。海外では演奏会と感染防止をどうすれば両立できるかを検証する取り組みが行われています。ベルリン・フィルの試験的公演をもとに、さまざまな対策を組み合わせればリスクを相当抑えられるというエビデンスもあります。私たちも検証された対策を取りながら、お客さまの不安をできるだけ軽減させて音楽を届けたいと思っています。また、演奏会に来られない全国のお客さま

写真 野瀬勝一

に向けてライブ配信を行うなど、新しい試みも始めています。

雨宮　コロナ禍に伴って社会のDX（デジタルトランスフォーメーション）化も進んでいますが、デジタルによる音楽配信も前向きな取り組みではないかと思います。

飯森　そうですね。ただ、インターネットを通して聴く音楽は生で聴く音楽とは全く違うので、引き続き、本番の演奏会場でいかに安心して聴いていただくかを工夫していくことが大事と思っています。

雨宮　レコードが普及し始めた頃、実演は廃れていくかもしれないという議論がありましたね。その頃、ピアニストのグレン・グールドのように「もう一切演奏会はしない」と宣言した演奏家もいましたが、今日まで生のコンサートは全く廃れていません。むしろレコードやデジタル配信で音楽を楽しむにつれて、かえって実演の良さがわかってきます。先日、しばらくぶりにコンサートを聴きに行ったのですが、演奏者の方々がうれしそうに音を奏でられていて、素晴らしかったです。私の音楽仲間は「この二年間で日本のオーケストラの水準が明らかに上がった」と口をそろえています。musizieren（ムジツィーレン）（音楽を演奏すること）の喜びが伝わってくるのです。

飯森　コロナによって失われていた表現の場に戻ることができた、その喜びでしょう。実は、一回目の緊急事態宣言の解除後に開催された全国初のフルオーケストラのコンサートは、私が指揮したんです。二〇二〇年六月二十日、大阪のザ・シンフォニーホールで日本センチュリー交響楽団とハイドンを演奏しました。新しい演奏様式にのっとった形で、舞台上で密にならないように演奏者は前後左右にディスタンスを取ったりして臨んだのですが、それでもみんな生き生きとして、すごく良い演奏になりました。鳴り響いた音だけでなくお客さまの熱もすごくて、あの演奏は一生忘れないと思います。

雨宮　デジタルによる音楽配信が広がりをみせる一方で、パフォーミングアーツとしての実演の意義も再確認されてきたと思います。両方を相乗的に生かす芸術活動の新しい形が、これからの道として見えてきたのではないでしょうか。

飯森　今年初めに企業の経営者の方々とご一緒する機会がありました。印象的だったのは「コロナ禍のもとで、仕事の面でも社会活動の面でも、いろいろ再発見があった」というお話が多かったことです。コロナの蔓延（まんえん）でたくさんの命が失われたのは本当に悲しいことですけれども、立ち止まることなく前を向いて歩み始めている方たちがビジネスの世界に多くいらっしゃると知って、何とか活動を続けている私たちはすごく勇気づけられました。

雨宮　二〇二〇年五月にドイツのメルケル首相（当時）が行ったコロナ対策に関する演説では「連邦政府は優先順位リストの一番上に芸術支援を置いている」として、困難な時期であるからこそ文化芸術活動が大事だという姿勢を強調しました。「ドイツは文化の国であり、私たちは全国に広がる多様な展示や公演に誇りを持っている」というのです。グリュッタース文化相（当時）にいたっては「アーティストは今、生命維持に不可欠な存在」と断言しました。こうした言葉には本当に心を打たれました。文化芸術活動は、コロナ禍で失われそうになって、その大切さが改めて認識されてきたような気がします。

飯森　本当にそうですね。芸術は社会にとって不可欠だと思います。

「地域」の文化芸術に誇りを持ってほしい

雨宮　飯森さんは現在、パシフィック フィルハーモニア東京の音楽監督などと同時に、山形交響楽団（以下、山響）の桂冠（けいかん）指揮者（注1）も務めておられます。二〇〇四年に常任指揮者として就任された頃の山響は「日本一小さいオーケストラ」が代名詞だったそうですが、今や全国的に注目されるまでに飛躍しました。山響をどのように発展へ導いたのでしょうか。

飯森　さきほど、芸術は社会にとって不可欠というドイツの文化相の話がありました。ただし、まずは、活動が行われている地域の方々に必要だと思ってもらわないと存在意義も価値も生まれません。山響に就任した当初、まずこのオーケストラが地元でどれくらい周知されているかを調べてみました。そうしたら、演奏者の多くが山形でのコンサートの後にお客さまから「あなた、楽器がお上手ですけど、普段のお仕事は何？」と聞かれたというんです。それくらい、山響はプロのオーケストラとして認知されていなかったわけです。

いかに地域に浸透するか、私は頭

（注1）素晴らしい演奏を感謝してオーケストラ側から贈られる称号。

をひねりました。新聞やテレビに取り上げてもらえるように発信したり、パンフレットを練り直したり。私が蔵王の温泉につかっている写真も使いました（笑）。捨て身でいろんなことをやったんです。

雨宮　まずは地元の支持を得ようということですね。

飯森　山形の方々は、地元のものを外に向かって積極的に「いい」と言わない気質があるんです。酒田市が舞台の連続テレビ小説『おしん』のように、言いたいことも控えてしまう。でも、外から来た私が「これはいい」「もっとアピールしよう」と繰り返すうちに、意識が変わりました。

雨宮　コロナ禍のためオンライン開催となることもありますが、われわれも年に数回、地域に赴いて行政や財界の方々と意見交換をする機会があります。その際、日本の地域は独自の素晴らしい文化や伝統を持っているのに、必ずしも発信力が強くない、もったいないなと感じることがあります。

飯森　今私がすごく感心しているのは、雨宮さんは地方とおっしゃらないでしょう。私、地方という言い方、すごく嫌いなんです。

雨宮　私は地域と言いますね。

飯森　一緒です。雨宮さんは東京出身でいらっしゃいますか。

雨宮　そうです。

飯森　私は鎌倉出身ですけれども、そういったところの人が、東京とそれ以外を分類するかのように「地方」を使うのは抵抗を感じます。

雨宮　日本の各地域には、どこへ行っても独自の文化や歴史といった宝があります。しかし、「地域の方々は意外に自分たちの宝に気づいていないのではないか」と、ある日銀の先輩が言っていました。日銀の事務所長を務めた後もその地に残り、観光振興などの仕事を続けた先輩でしたが、私も日本の地域はそれぞれ独自の文化にもっと誇りを持っていいと思います。

日本人特有の繊細さが西洋音楽の中に生きる

雨宮　飯森さんはドイツのヴュルテンベルク・フィルハーモニー管弦楽団で音楽総監督や首席客演指揮者を長年にわたり務めておられます。日本人がどうすれば国際的に活躍できるか、これは経済や経営の分野でも大きな課題ですが、何が大事でしょうか。

飯森　その国の慣行や文化に通じることも必要ですが、自分の中の美学みたいなもの――ドイツ人やイタリア人とは違う日本人特有の美学を意識して、大切にしてほしいと思います。さらには、日本である程度の評価を得てから海外に出ること。日本でうまくいかなくても海外に行けば何とかなるんじゃないか、などと考える人がいるのですが、残念ながら現実はそんなに甘くないですね。

雨宮　文化的・歴史的に違う背景をもつ西洋の音楽を日本人が奏することに難しさはお感じになりますか。

飯森　言葉の難しさはあります。例えばベートーヴェンの曲を研究すると、ドイツ語の抑揚と音符の抑揚が一体的になっていることがよくわかります。シラブル（音節）とメロディーがどのように同期しているか、これはドイツ留学ですごく学びました。私はベートーヴェンの交響曲第九番などの自筆譜（じきひつふ）を復刻したスコアを持っていますが、そこには従来のスコアにはないコントラバスのモチーフが書かれていたりします。指揮をする時は、その部分を書き起こし、演奏してもらいます。作曲家が書いたオリジナルの譜面を尊重するのが私のやり方なので、初稿や自筆譜を常に研究しています。そのようにして楽譜と対面するたびに、その国や地域の文化と言葉と音楽が、相互に密接に連関していることを強く感じます。

雨宮　日本人が西洋音楽を奏することの意味については、どう考えたらいいでしょうか。私自身、日本人に生まれながら、やれベートーヴェンの演奏はこれがいいとか、こっちは物足りないなどと議論していると、ふとある種の違和感というか罪悪感をもつ時があるのですが。

飯森　日本人が異文化の音楽を受容して表現する時、日本人ならではの細部へのこだわりがものすごく出てきます。それがいい面もあれば悪い面もありますが、伝統的な解釈から解放された音楽が生まれるという面もあると思います。さきほど、日本センチュリー交響楽団とのハイドン演奏に触れました。現在、この大作曲家の交響曲の全曲連続演奏会に取り組んでいます。実は、ハイドンの音符はとてもシンプルで、楽譜に書かれている演奏上の指示も少ない。演奏者はどう奏でるか、かなりの部分を自分で考えなければなりません。それを日本人が奏でると、ドイツ人やオーストリア人が奏でるより繊細になると思いますね。繊細に表

現したいという潜在的意識が日本人の血の中にあり、それがあるからこそ日本人は西洋音楽に新たな解釈を与えられるのです。

雨宮　今のお話を経済に当てはめて考えると、日本人の細部にこだわるつくり込み、あるいは精緻に追求していくような取り組み方は、高度成長の時代に大変うまく働きました。非常に性能の高い電気製品や自動車などを次々と生み出した。ところが、モノづくりの形態が変化し、経済活動のソフト化、サービス化が進む現代では、匠の技がデジタル化されたり、ソフト開発やコンテンツ競争が激化しています。こうした大きな環境変化の中で、日本人は自分の良さを十分発揮しきれていないのかもしれません。西洋音楽に生きる日本人の特質や美学を、経済分野でもどうやって生かすか、改めて考えてみる価値がありそうですね。

ドラッカーの指揮者論と未来型組織としてのオーケストラ

雨宮　指揮者というのは不思議な存在です。自分自身で楽器を鳴らすわけではないのに、音楽全体を操っていく。実は私、若い頃、指揮者に憧れていたのです。カラヤン（注2）の写真を部屋にべたべた貼って、音楽高校に進もうと考え、親に内緒で願書も取り寄せていました。

飯森　今度、機会があったら一回振られませんか。

雨宮　いやいや、もう、スピーカーの前で腕を振っている「エア指揮者」で十分です。指揮といえば、ピーター・ドラッカー（注3）は指揮者を組織のマネジャーになぞらえて面白い指摘をしていますよ。「部分の和より大きな全体、すなわち投入した資源の総和よりも大きなものを生み出す生産体を生み出すことである。それはオーケストラの指揮者と似ている」（ピーター・ドラッカー著『マネジメント』）と。指揮者は行動、ビジョン、指導力を通じてオーケストラの各パートを統合する。そうすると、部分を合わせたものより大きな、まさに生きた音楽が生み出されるというわけです。

飯森　その通りだと思います。オーケストラには、素晴らしいポテンシャルを持っている奏者や、高い教育を受けてスキルを磨いてきた奏者が、それぞれのパートでの厳しい選抜をくぐり抜けて参加しています。全体では五〇人、六〇人、多い場合は一〇〇人近くになりますが、一つ言えることは、クオリティーの低い演奏会は誰もやりたくない。それは企業でも一緒ですよね。あるプロジェクトがあったら絶対成功させたい。しかし「どうでもいいや」と思っている人が一人でもいると、まずうまくいかない。そういう奏者を出さないように、指揮者が束ねなければなりません。そこで重要なのは、「差し入れ」ですね……、これは半分冗談で、半分本当なんです。差し入れされると誰しも嫌な気持ちにはなりませんからね。

雨宮　そういう配慮もしながら、音楽のエリート集団をリードしなければいけないわけですね。

飯森　演奏曲に対する指揮者のビジョンは最初の練習からしっかりと示していかないといけません。ビジョンに反発する人もいますが、どうしたら協調してくれる方向に持っていけるか、それも指揮者に試される能力です。それぞれの奏者はプロですから、プライドもあるし、私の楽曲解釈に対する異論もあります。その人の内面を見るのも指揮者の役目です。

雨宮　組織論的に言うと、オーケストラは縦割りの独裁的な組織ではない、とはいえ仲良しクラブでもない。指揮者が、一人一人プロである構成員の合意を得ながら全体を引っ張っていく、そんな組織に見えます。ドラッカーは、そうしたオーケストラのあり方は、二一世紀型組織の理想像であるというようなことも言っています。指揮者とはデジタル時代の分散型社会における理想のリーダー像かもしれません。

飯森　そうですね、演奏会の本番では、各パートのエキスパートたちが指揮者の手と身体の動きから届く「糸」によって束ねられ、一つの音楽として奏でられるのだと思います。

雨宮　指揮者とオーケストラの関係性は、芸術活動以外にも通ずる奥深さがありますね。非常に貴重な話を伺いました。ありがとうございました。

（注2）ヘルベルト・フォン・カラヤン。オーストリア出身の指揮者。1955～1989年までベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の終身指揮者・芸術監督を務める。
（注3）オーストリア出身の経営思想家。経営・管理に関する多くの用語・概念を生み出した。

日本銀行のレポートから

日本銀行は、1月、4月、7月、10月の政策委員会・金融政策決定会合において、先行きの経済・物価見通しや上振れ・下振れ要因を詳しく点検し、そのもとでの金融政策運営の考え方を整理した「経済・物価情勢の展望」（展望レポート）を決定し、公表しています。また、2022年4月以降は、展望レポートの内容を、より幅広い読者に伝えるための取り組みとして、そのポイントをイラストとともに簡潔に整理した資料（ハイライト）を公表しています。本稿では、2022年4月の展望レポート（基本的見解は4月28日、背景説明を含む全文は5月2日公表）のハイライトをご紹介します。＊全文は、日本銀行ホームページに掲載されていますので、ご関心のある方は、ぜひそちらもご参照ください。https://www.boj.or.jp/mopo/outlook/index.htm/

「経済・物価情勢の展望」（展望レポート・ハイライト）

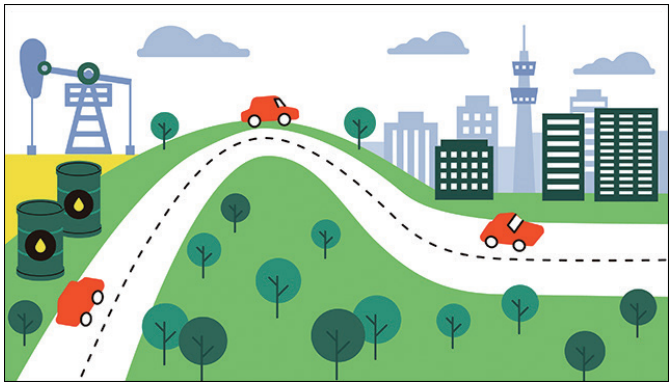
2022年4月

日本経済は回復に向かう

日本経済は、ウクライナ情勢等を受けた資源価格上昇により下押しされますが、感染症の消費や生産活動への影響が和らぎ、海外経済の成長や緩和的な金融環境、経済対策の効果にも支えられて、回復していきます。

物価は上昇率を高めたあと減速する

消費者物価の前年比は、今年度は、世界的なエネルギー価格の大幅上昇からいったん二％程度まで高まりますが、その後は減速します。エネルギーを除くと、今年度以降、消費者物価の前年比は緩やかに上昇していきます。



感染症、ウクライナ情勢、市場動向に注意

経済・物価見通しのリスク要因としては、感染症の動向、ウクライナ情勢の展開、資源価格・金融市場・海外経済の動向に注意が必要です。

強力な金融緩和を継続する

日本銀行は、二％の「物価安定の目標」の持続的・安定的な実現を目指しています。また、感染症からの回復を支援するため、資金繰り支援と金融市場の安定に努めていきます。

政策委員の経済・物価見通し

（注）●は実績値、○は見通しです。

地域の底力――岐阜県恵那市

ふるさとへの愛と誇りが導く岐阜県恵那市のまちづくり

地域を思う住人の心が一つにまとまれば、
まちの大きな活性化につながる……。
官民、地域、世代など垣根を超えた取り組みが、
岐阜県恵那市の各地で生まれ、
未来へと続く道を切り拓(ひら)いている。

大正時代、木曽川中流に完成した大井ダムにより生まれたダム湖を要とする「恵那峡」は、桜や紅葉の名所としても知られる恵那市の景勝地。大井ダムの建設は、福沢諭吉の娘婿で「電力王」とも呼ばれる福沢桃介によって主導された。

取材・文 山内史子
写真 野瀬勝

かつて織田家と武田家が覇権を争った岩村城跡。標高717メートルに立つ山城であり、2022年10月には第29回「全国山城サミット」が開催される。

地域の魅力を知ることがまちの活性化につながる

岐阜県南東部に位置する恵那市は人口約四万八〇〇〇人。愛知県名古屋市から車や電車で約一時間の距離ながら、景色の要ともいえる標高一一二八メートルの笠置山をはじめとして標高七〇〇～一〇〇〇メートル級の山々に囲まれた自然豊かな景色が広がる。

一九五四年、旧恵那郡の八つの町村（大井町、長島町、東野村、三郷村、武並村、笠置村、中野方村、飯地村）が合併し恵那市が誕生。二〇〇四年には、さらに五つの町村（山岡町、明智町、岩村町、上矢作町、串原村）も合併して現在の恵那市に至るが、平安時代の『延喜式』に「恵那」の名が記されているほど一帯の歴史は古くまで遡ることができる。

戦国時代には、長きにわたり織田信長と甲斐・武田家との係争地に。さらに明智町は明智光秀の出生地候補の一つとみなされており、江戸時代には中山道沿いにあったため栄えたと語るのは、市役所職員を経て二〇一六年から現職を務める市長の小坂喬峰氏だ。

現状、緩やかながらも人口が減少し、二〇六五年には半減すると推測される中、小坂氏はまちの活性化に向けて「誇り」「愛着」という言葉を掲げる。

「雇用や学ぶ場に限界があり、高校卒業後は進学、就職を含めて八割近くの子どもたちが地元を離れます。それでもなお恵那に愛着を持ち、先々は帰って暮らしたいと思ってもらうためには、地域を誇りに思えるブランドづくりが大切だと考えています」

ふるさとをもっと知ってもらおうとの思いから、市内全校で行われているのが「ふるさと教育」だ。江戸時代末期の儒学者・佐藤一斎、実践女子学園の創立者・下田歌子、一九二四年に日本初のダム式水力発電所を建設した福沢桃介らの偉業があらためて教育の場で語られている。

合併により力を合わせつつも、合併前の一三の町村が個性を失うことなく地域自治区として独自のまちづくりを行っているのも興味深い。

「サービスを含めて何もかも均一化されると、地域の魅力が薄れかねません。一三のまちにはそれぞれ、光る個性や誇るべきものがあるはず。土地に根付いた文化や歴史は住む人のアイデンティティーであり、また各地の独自性を残すことで互いを意識する競争が生まれ、市全体の元気につながるとも思っています」

とはいえ、住む人は往々にして

「ここで生まれ育ち、ずっと住み続けてきた僕自身が、恵那は誇るべきまちだと思っています。その思いを、市民の皆さんにも抱いていただきたい」と話す市長の小坂喬峰氏。手前は恵那市の公式キャラクター「エーナ」。

上／古い町並みが残る城下町の一角で醸される岩村醸造株式会社の「女城主」は、戦国時代の一時期、藩主亡き後に妻が城主を務めた歴史に由来。
右／五平餅は恵那をはじめ東美濃のソウルフード。

地元産の古代米、寒天、恵那山麓で寒天を食べて育った三浦豚、この３つの素材を使ったご当地グルメ「えなハヤシ」は、恵那出身でハヤシライスの考案者とされる早矢仕有的（はやしゆうてき）にちなむ。

上／寒暖差の大きい気候を生かした特産品で、日本一の生産量を誇る細寒天。煮詰めた天草を細長く切り、露天の棚に並べて干す。（写真提供：恵那市）
右／低カロリーが魅力の寒天ラーメンも販売されている。

地元の魅力に気づきにくいものだ。

「そういう意味では外から見た恵那市に対する評価もまた大切になってきますから、外部の方々と広くやり取りをし、お力を借りながらあらたなビジネス、まちづくりを進めているところです」

その一環として小坂氏は二〇一九年から、県や国の機関、民間企業での市職員の職場外研修や互いの出向を積極的に推し進めてきた。将来的には二〇二七年に東京～名古屋間で開業予定の、リニア中央新幹線への期待も大きい。隣接する中津川市に完成する岐阜県駅（仮称）の利用により、東京との移動が約一時間になると見込まれる。

「観光をはじめ各方面において、『リニア開業までに』という目標が生まれています。若い世代を含め、恵那を拠点にした多様な動きが出てきているのがうれしいですね」

官民の連携を広げる地域商社のチャレンジ

小坂氏が語るあらたな取り組みの背中を押す役割を担うのは、二〇二〇年一月に設立された一般社団法人ジバスクラム恵那。恵那市、恵那市観光協会が設立メンバーであり、業務を担う職員の中心は市役所関係者だ。牽引（けんいん）役のひとり、戸取健一郎氏は民間企業から恵那市役所へ出向しており、ジバスクラム恵那の業務執行理事を務める。

「ジバスクラム恵那の核は、観光業、農林業を中心とした地域産業の活性化。企業誘致、人材育成、商品開発支援、市内外とのビジネスマッチングなど、幅広い分野においてコーディネーター役となる地域商社です」

名称には市民を含む恵那市の地場全体がスクラムを組むとの思いが込められている。前例がないチャレンジだったため、最初に着手したのは独自の支援や取り組みを地域の人に理解してもらうための情報発信だったと戸取氏は話す。

「時間はかかるかもしれませんが、じっくり足固めをしていくことが次世代につながると思っています。市内外の方々から自由にご提案をいただき、将来的にはそこからあらたなビジネスにつながる化学反応が生まれる状況が理想です」

「情報発信が少しずつ実を結び、恵那山麓野菜の展開を手伝ってくれる方々が増えてきました」と喜ぶジバスクラム恵那・業務執行理事の戸取健一郎氏（左）。「ゼロからの取り組みなので苦労は少なくありませんが、失敗もまた教訓になっていますし、やりがいも感じています」とは、市役所から出向して農林関係の振興を担う横光哲氏（右）。

実店舗とオンラインで特産品を販売する「Aeru SHOP」とともに、ジバスクラム恵那の活動として前進しているのが「恵那山麓野菜」のブランド化だと話すのは、市役所から出向した農林担当の横光哲氏だ。

「農業に携わる方々や関係者がご自分で商品を開発し、市場を掘り起こすのは容易ではありません。その役割をわれわれが担い、生産を持続しながらきちんと生活できるように、安さではなく生産者の思いを反映した価格で販売していくのが一つの目標です。他には、このプロジェクトのメンバーが

JR恵那駅前にあるジバスクラム恵那の事務所１階に設けられた「Aeru SHOP」では、恵那山麓野菜をはじめとする上質な農産物や加工品が並ぶ。

左／2007年に岐阜県初の風力発電所として建設された「上矢作風力発電所」。右／道の駅「おばあちゃん市・山岡」では、直径24メートルの巨大な木製水車が景色を彩る。

所有する食品の加工所で廃棄処分の対象だった野菜を引き取り活用する、フードロスの削減も行われています」

山間に位置する恵那の農業は機械化や大規模展開が難しいものの、寒暖差のある気候などが幸いして多種多様な野菜がそろう。ブランド化の進展により地元の人々が少しずつ、あらためてそのおいしさを認識するようになる中、大手量販店との連携も始まった。

「取引を広げていくためには、参画する農家を増やしていかなくてはなりませんし、新規就農者への支援も必要になるでしょう。まだ道半ばですが、スピード感をもって動けるのが強み。運営のノウハウを蓄積しながら人を育て、あらたな雇用の場や流通の仕組みが地域に根づいていく将来を目指しています」

恵那市内にはキャンプ場やコテージ、ロッジなどが多く、利用者は毎年約五万人を数えることにも着目。二〇二二年四月には、ジバスクラム恵那と民間企業が連携したグランピング施設が誕生したと戸取氏は語る。

「バーベキューに恵那山麓野菜をはじめ地元の食材を提供し、後々の購入につながる流れをつくりたい。さらには、そのスキームを生かしながら複数の事業者と手を組んで展開できるかどうかが今後の課題です。地元のシェフとの食育関連ビジネスも企画が持ち上がっていますが、そういったこれまでにない仕組みづくりを重ね、循環させていきたいですね」

最先端技術と活力を過疎地に運ぶドローン事業

ジバスクラム恵那を介した恵那市との連携協定により、二〇二〇年七月から恵那市南東部の上矢作町を拠点として広くドローン事業を展開するのが株式会社ROBOZ（ロボッツ）だ。代表取締役の石田宏樹氏は、もともと出身地である岐阜県郡上市でビジネスを手掛けていたという。

「ここ数年、ドローンの存在は注目を浴びているものの都会では規制が厳しく、事業どころか興味のある人が体験や練習をすることすら難しい。しかしながらここでは市や地元の協力を得ているため、開発や実験を含めて自由に飛ばすことができるのが魅力です」

上矢作町は住民の高齢化に伴う過疎化が問題となっていたが、ドローンの体験会やスクールから、道の駅での販売、レースやショーといったイベント開催まで、関心を集める場が多彩に設けられ、恵那市内はもちろん県内外から多くの人が訪れるようになった。ふるさと納税の返礼品にも、ドローン体験が含まれている。加えて石田氏は、子どもたちの教育事業にも情熱を注ぐ。

「現在われわれは上矢作町の小中学校や近隣の高校で、ドローンICTというプログラミングの授業を行っています。子どもたちが自分で動きをプログラミングするだけではなく、それに応じて実際にドローンを飛ばしてミッションのクリアを競うレースも行うので

「地域活性化のためにドローンでなにができるかと子どもたちに問うと、思いがけないアイデアが出てきます。そのような時間を楽しく感じています」と話す小中学校、高校でドローンの授業を担うROBOZ代表取締役の石田宏樹氏。

上／ROBOZが行う体験プログラムには、市内外から多くの人が集まり、子どもたちにも人気が高い。（写真提供：株式会社ROBOZ）

左／道の駅「上矢作ラ・フォーレ福寿の里」では、各種ドローンをも取り扱う。

上／明智町の「大正ロマン館」では、この地で生まれたという説がある明智光秀に関する展示も見られる。
下／2019年から開催されている「恵那市公式Instagramフォトコンテスト」には、市内外から数多くの応募が寄せられる。写真は串原木根地区の「きねしだれ桃園」で撮影された第1回の入賞作品。（写真提供：恵那市）

すが、画面上だけで完結せず、成果をリアルに体験できるので盛り上がりますね」

高齢化が進む状況をふまえ、食料や薬といった生活必需品を運ぶドローンの物流サービスの実証実験も始まった。また、災害対策、農業の負担を軽減する農薬散布や獣害対策など、地域への貢献が考えられたROBOZの事業構想は実に幅広い。ドローンが飛ぶ空は、無限の可能性を秘めていると石田氏は期待をよせる。

「サービスが広がればやがて、プロフェッショナルなパイロットのニーズなど雇用の場も広がるでしょう。ドローンのまち上矢作、恵那と呼ばれ、その先進地であるここで暮らしたいと思う人が増える未来を思い描いています」

映画製作に込められた恵那が一つにという思い

あらたな取り組みに限らず、地域への思いは時間をかけて恵那市で開花してきた。その一つが映画『ふるさとがえり』だ。この作品は恵那市の有志が中心となった「えな『心の合併』プロジェクト」により、二〇一一年に完成。恵那を舞台とし、地域の人々が担う消防団の活動を軸に、人のつながりや時にその絆の強さから生じるジレンマが、豊かな自然の風景とともに描かれている。

プロジェクトの立案から携わってきた、株式会社ゼロワンカンパニー代表の小板潤治氏が当時を振り返る。

「二〇〇四年の合併後、それぞれに文化が異なる一三の地域が心を一つにするためになにかできないかと考えていたとき、映画製作による地域活性化に取り組む林弘樹監督の活動を知りました。恵那は司葉子さんが出演した一九五七年版『青い山脈』のロケ地で、われわれのおやじ世代が頑張ってそれを支えたと聞いていたこともあり、話が盛り上がったわけです」

小板氏らは協力者や資金集め、住民の理解を得るために奔走し、最終的には関連イベントなどを含めて数千人の市民が関わった。製作から一〇年が過ぎた今も広く上映会が行われ、全国四七都道府県での開催は千回を超える。

「正直なところ、映画の完成により劇的にまちが変わったわけではありません。ただ、かつては何かする際に上の世代にお伺いを立てるという縦のつながりが強固でした。しかし、若い世代が動いたことでその垣根が少しずつ取り払われていったように思います」

「映画の製作においては、自分たちのふるさとは自分たちで守るということがテーマだったこともあり、消防団の活動に焦点をあてました」と語る、ゼロワンカンパニー代表の小板潤治氏（右）。恵那峡映画祭実行委員長の西尾巌太氏（左）の本職は、恵那市農政課職員。食文化の掘り起こしなど業務ともリンクさせながら、地元の人が楽しめる映画祭にしていきたいという。

渋江譲二、佐藤仁美が主演を担った映画『ふるさとがえり』は、笑福亭鶴光、斎藤洋介、村田雄浩、高畑淳子らベテラン陣が脇をかためた。脚本の栗山宗大氏は、三カ月ほど恵那に滞在して作品づくりに臨んだという。

加えて、この映画製作と並行して映画をもっと知ろうという機運が高まり、映画塾やショートムービーコンテストの開催へとつながる。「『青い山の麓』ENAショートムービーコンテスト」から始まり、「恵那峡映画祭」と名称を変えて二〇二二年には一三回目を迎

コロナ禍以前に行われた第1回恵那峡映画祭の授賞式の様子。
（写真提供：恵那峡映画祭実行委員会）

恵那駅～明智駅（写真）を結ぶ明知鉄道では、リニア中央新幹線開業に合わせてSLの走行が計画されている。

えると話すのは、恵那峡映画祭実行委員長の西尾巌太氏だ。

「首都圏を含め、短編映画部門は毎回平均して三〇件ほどの応募があります。二〇二一年からはシナリオ部門を設けたのですが、岐阜県外からだけでも約三〇〇件の応募があり驚きました。シナリオを書く際には恵那について調べる方が多いとも聞き、まちを知ってもらう機会になっているのがうれしいですね。一方で、地元からの応募が思うように増えていないのが課題です」

少しずつ地元の高校生がワークショップに参加したり、作品を応募したりという流れができつつあったものの、コロナ禍のため人が集まるようなイベントは避ける必要があり、道が閉ざされていると西尾氏は話す。

「収束後、ふたたび映画祭に関心をもってもらえれば、子どもたちが恵那の良さに気づくきっかけにもなるでしょう。より多くの方々に恵那や映画祭に関わっていただくために、開催時期の調整や観光と絡めた宣伝も今後進めていく予定です」

若い移住者を呼び寄せた空き家の再生活動

小さな尽力の積み重ねが地域の暮らしを大きく変えた、恵那市南東部に位置する串原の状況も全国から注目を浴びている。その中心人物、奥矢作移住定住促進協議会会長の大島光利氏が立ち上がった発端は、合併前の二〇〇〇年に一帯を襲った東海豪雨災害（恵南豪雨災害）だった。

当時、恵南消防組合消防本部消防長を務めていた大島氏は独自に調査を進め、林業の衰退により山が守られていないことが甚大な被害の要因だと気づく。退職後の二〇〇六年、大島氏はNPO法人奥矢作森林塾を立ち上げ、市内外の約三〇名が森の再生に力を注ぐようになった。

「山の手入れをしなければ、また大きな災害が起きる。過疎化が進む中、意欲のある若い人に来てもらい地域を元気にする必要があると考え、『みんなでやろまいか』（岐阜県の方言で「みんなでやろう」という意味）というキャッチフレーズを掲げて仲間を募りました」

その頃の串原では住む人がいないまま朽ちていく空き家も目立ち、大島氏は地域を蘇らせるためにその調査をも手掛けるようにとはいえ持ち主の行方が分からないケースが多く、大島氏は仲間とともに東京から大阪まで親戚などをたどって歩いたという。

紆余曲折を経て、「リフォーム塾」という形を取りながら最初の古民家復活が進められたのをきっかけに、口コミで田舎暮らしを望む移住希望者が増え続け、権利関係がクリアになった空き家のリフォームが重ねられてきた。その結果、二〇二一年までに三〇軒の古民家が息を吹き返し、八一人が

奥矢作移住定住促進協議会の取り組みが農林水産省の「ディスカバー農山漁村（むら）の宝」に認定され、奥矢作森林塾が総務省の「ふるさとづくり大賞」を受賞するなど、大島光利氏が積み重ねてきた活動は多方面から評価されている。

奥矢作移住定住促進協議会や奥矢作森林塾の拠点であり、最初に古民家リフォームが手掛けられた「くしはら田舎暮らし体験館　結の炭家」では、囲炉裏を囲んでの集いやイベントが行われている。

道中に偶然、ニホンカモシカを見かけたほど、串原は豊かな自然に恵まれたエリア。

東濃や中濃、飛騨地方を中心に昔から伝わる朴葉（ほおば）寿司の伝統を守ろうと、2020年に市民グループ「恵那の朴葉寿司プロジェクト」が発足。2021年からは初夏のイベントとして、市内の複数店舗などが朴葉寿司を持ち寄る「朴葉寿司まつり」が恵那市と連携して開催されている。恵那市の「朴葉の食文化」は、文化庁が食文化の継承・振興のために認定する「100年フード」の一つ。（写真提供：恵那市）

移住。空き家は四軒まで減少した。その流れを支えてきたのは、契約書の作成ほか登記に必要な複雑な手続きを大島氏が担ったことにある。

「費用対効果を言い出したら、何もできません。誰かが動かなければならない。そう思いながら一〇〇％ボランティアで進めてきたのは、この地域が消滅するのではないかという危機感があったからです」

大島氏の苦労が実り、国や市の協力を得て二〇一一年に奥矢作移住定住促進協議会が発足。地域を離れる人から、家のその後を託されるようにもなったという。

「現在の串原は移住者が約一五％を占め、森林塾をはじめ移住してきた若者たちがリーダーを務めるようになりました。新規で農業、林業に取り組む人もいます。もとから住む人が、誰が来てもウエルカムだったのにも助けられました。今後は、子どもの数が増えるといいですね。ここをふるさととして生まれ、育ち、成長してまた帰ってきてくれることを願っています」

街道の行き来が育んだ恵那の人の懐の深さ

「恵那は人がいい」

各地を歩く中、幾度となく聞いた言葉だ。その気質について、市長の小坂氏はこう語る。

「恵那の人たちは、穏やかで優しく寛容だと昔から言われており、私自身もそれを実感しています。江戸時代の中山道、奈良時代まで遡れば東山道と、恵那は何百年も昔から街道の拠点の一つでした。人や情報が行き来する中での営みにより、独自のマインドが育まれてきたのかもしれません」

二〇二一年には、第五回目となる女性ドライバーによる「WOMEN'S RALLY in 恵那2021 & MASC RALLY 2021」が開催された。そして、二〇二二年十一月には隣接する中津川市ほか愛知県内三市とともに、恵那市の公道が「FIA世界ラリー選手権 フォーラムエイト・ラリージャパン2022」の舞台となる。コロナ禍のため延期されてきたイベントだが、無事に開催されれば、地元の道を車が疾走する姿が、世代を超えて住む人の記憶に鮮やかに刻まれ、ふるさとを離れた人もその様子を輝かしく思うことだろう。国内外から関係者や観客が訪れるそのイベントの継続は、広く恵那を好きになってもらういい機会にもなるのではないかと、小坂氏は笑顔を見せた。

2021年12月に2日間にわたり開催され、39台がエントリーした「WOMEN'S RALLY in 恵那 2021 & MASC RALLY 2021」。日本で唯一の女性ドライバーによるラリーとして注目を浴びているこのラリーは2021年で第5回目を数える。（写真提供：恵那市）

そして、未来。リニアという新しい道が首都圏とつながり、ドローンが空の道を自在に広げているであろう頃、恵那の人の心には、さらなる地域への思いが芽生えているに違いない。

日本の棚田百選に認定された、中野方町坂折地区に広がる棚田。

日本銀行決済機構局　決済システム課デジタル通貨グループの仕事

未来を見据え 中央銀行デジタル通貨の検討に尽力

社会のさまざまな領域でデジタル化が進む中、日本銀行では二〇二一年度から中央銀行デジタル通貨に関する実証実験が進められています。実際に発行するかどうかは決定していませんが、変化が著しい世の中に中央銀行として適切に対応し続けるためには、早い段階から着実な準備を進めていくことが必要です。現在、そうした未来を見据えて行われている多種多様な実験を担っているのは、決済機構局決済システム課デジタル通貨グループです。利便性が高く、安心、安全であることを目指しながら、前例のない業務として未知の領域を切り拓く努力が積み重ねられています。

誰でも、いつでも、どこでも、安心して使える決済手段を目指して

二〇二〇年十月、日本銀行は「中央銀行デジタル通貨（Central Bank Digital Currency）」（以下、CBDC）に関する取組方針を発表しました。CBDCとは、中央銀行が発行する新たな形態の電子的なマネーのことです。二〇二一年四月からは、取組方針に基づいたさまざまな実証実験が行われてきました。その背景について、業務を担う決済機構局決済システム課デジタル通貨グループ長で企画役の山田健さんはこう語ります。

「情報通信技術の進歩や多様な領域でデジタル化が急速に進む状況を考えると、将来的に社会のCBDCへのニーズが急速に高まる可能性があります。現時点で発行するか否かは決まっていませんが、決済システムの安定性と効率性を確保するためにも、今から準備を進めることが重要との認識で検証を進めています」

現段階の実証実験の対象は、個人や一般企業を含む幅広い利用を想定した「一般利

■実証実験のスケジュールと制度設計面の検討内容

実証実験

概念実証フェーズ１	概念実証フェーズ２	パイロット実験
システム的な実験環境を構築し、CBDCの**基本機能**（発行、流通、還収）に関する検証を行う。 → **2021年４月～2022年３月**	フェーズ１で構築した実験環境にCBDCの**周辺機能**を付加して、その実現可能性などを検証する。 → **2022年4月に開始**	概念実証を経て、さらに必要と判断されれば、**民間事業者や消費者が実地に参加**する形でのパイロット実験を行うことも検討していく。

制度設計面の検討

① 中央銀行と民間事業者の**協調・役割分担**のあり方
② **金融システムの安定**等との関係
③ **プライバシー**の確保と利用者情報の取扱い
④ デジタル通貨に関連する**情報技術の標準化**のあり方

用型CBDC」。二〇二一年四月～二〇二二年三月に実施された「概念実証フェーズ1」では、システム的な実験環境を構築し、CBDCの基本機能である発行、流通、還収などに関する検証が行われました。二〇二二年四月からは、「概念実証フェーズ2」がスタート。フェーズ1で確認した基本機能に加えて、決済の利便性向上や外部システムとの連携といった各種の周辺機能の実現可能性や技術的な課題について検証が重ねられています。

■フェーズ2では、3つのブロックに分けて検証作業（要件定義、開発、実機・机上検証）を進めていく

決済の利便性向上	1. ユーザーによる送金指図の予約 2. ユーザーの依頼による一括送金、逆引送金 3. オンラインCBDCとオフラインCBDCの接続方法（チャージ、ディスチャージ）
経済的な設計（金融システムの安定確保のためのセーフガード等）	1. CBDCの保有額に対する制限 2. CBDCの取引額（1回あたり、一定期間内）に対する制限 3. CBDCの取引回数（一定期間内）に対する制限 4. CBDCの保有額に対する利息の適用 5. ユーザーの属性に応じた異なる制限の適用
仲介機関間・外部システムとの連携	1. 複数仲介機関による1ユーザーへの複数口座の提供 2. 複数口座の「名寄せ」 3. 民間決済サービス、公金システム等との接続方法 4. 現金とCBDCを交換する方法

「CBDCの発行により銀行券がなくなるわけではありません。現在の決済システムを全体としていかに改善できるかが大きな課題です。海外では既にCBDCを発行している中央銀行があるほか、実証実験や調査・研究などを含めると約八割の国々で何らかの取り組みが進められています。とはいえそれに追従するのではなく、日本の決済をより安全で効率的なものとするために果たしてCBDCは必要なのか、という問題意識からきちんと検討を進めなければなりません」

求められる基本的な特性は、ユニバーサルアクセス、セキュリティ、強靱（きょうじん）性、即時決済性、そして民間決済システムとの相互運用性。

「私たちが目指すCBDCは現在の現金と同様、『誰でも、いつでも、どこでも、安心して使える』決済手段です。たとえば日本の銀行券は触るだけでお札の種類が分かるなどさまざまな工夫が施されており、最終的にはそういった細部まで考える必要があります。また決済機構局内、あるいは日本銀行の中だけで意思決定する類のプロジェクトではなく、幅広い分野の関係者から多様なご意見を伺いながら進めていくことも大切です」

金融業界や財務省、金融庁との「中央銀行デジタル通貨に関する連絡協議会」、IT関連ほか一般企業も参加する「デジタル通貨分科会」など、多くの場で積極的に議論されています。

「このプロジェクトは最初の段階からすべてが決まっているのではなく、関係者や専門家の方々との議論を経て調整を重ねていくもの。理解の進度や社会状況の変化に応じてプロジェクトを修正して調整する柔軟性が欠かせないと思っています」

前例のないプロジェクトの礎を構築していく醍醐味（だいごみ）

実際の実証実験は、日本銀行がシステム関係業務を委託したシステムベンダーとともに進められています。

「前例のないプロジェクトであり、ほぼゼロベースからのスタートですから、CBDCに関して日本銀行が目指す方向性や実証実験で何を明確にするのかをベンダーに丁寧に伝え、システムの一連の流れを表す業務フロー図の作成にも時間をかけました」と話すのは、企画役補佐の明間俊宏さんです。

「業務フロー図に関しては、正常稼動時以外の、異常時・例外時の処理をどこまで書き込むかの判断が難しかったですね。本来、決済システムの構築においては、エンドユーザーの残高不足で送金ができないと

きにどのようにエラーを返すかといった例外的な事項もすべて記述しないと成立しないのですが、今回は基本的な決済機能に焦点をあてた検証です。エンドユーザーや仲介機関、そして中央銀行といった複数の関係者が業務フロー図上に登場するなか、想定される例外をすべてクリアしようとすると必要以上に複雑になってしまいます。一方、実証実験を進める上で何を例外的な事項と考えるか、人によって重点の置き方が異なることもありますから、広く意見を聞きながら作業を進めました」

苦労はありながらも、プロジェクトの初期段階から携われる喜びがあるとも。

「技術の進化は著しくスピーディーですから、仮にCBDCが発行されるとなった際、われわれの実証実験とは異なる方向に進む未来もあり得ます。しかし、現段階での試行錯誤が先々につながっていく。礎である最初のフェーズを担えることに、大きな責任を感じています」

最新の技術を駆使しつつ重ねられる地道なアプローチ

フェーズ1の実証実験では、将来CBDCを発行することとなった場合に求められる処理性能について、ピーク時における一秒間の決済処理量を一〇万件以上と想定しました。その実現に向けて、CBDCシステムの基盤となる「CBDC台帳」について有力と考えられる三つの設計パターンが用意され、処理性能や信頼性、機能拡張性の比較、検証が行われました。実験用の台帳システムの処理性能を計測するための「高負荷シナリオ」として、一秒間の決済処理量を三〇〇〇件と設定するなど、実験の細部を中心となって企画したのは主査の村越智文さんです。

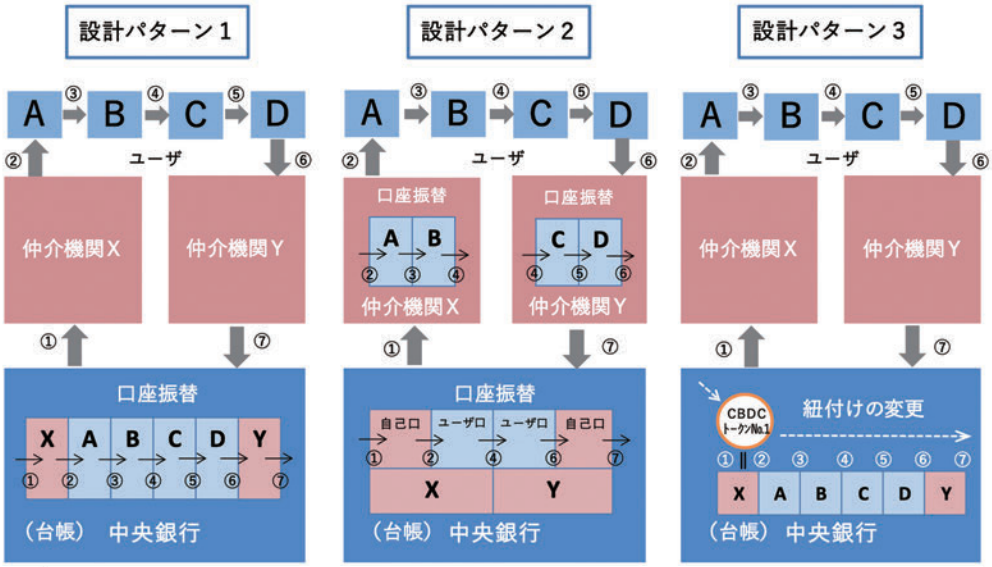
「実験は実際にサーバーを目の前に置いて構築するのではなく、クラウド型といって、インターネットから接続できる仮想環境を構築して行われています。クラウド上の仮想サーバーの場合、実際のサーバーの利用に比べて費用や時間を要せず、更新が容易にできるメリットがあります」

日々の業務では、実験の測定を行うベンダーとの頻繁なディスカッションにも重きが置かれています。

「問題点が見つかるなど、時には行きつ戻りつもあります。そのリスク軽減のためにも大切なのが、ベンダーとの間で認識のずれがないかを逐次確認して調整すること。金融、経済が専門のわれわれと、いわば無形のものづくりに携わるベンダーとは、背景やスタンスが異なります。それぞれの専門用語が通じないケースもあり、小さな齟齬（そご）がその後に大きく影響しかねないので、細かい質問や相談を重ねながら、そのギャップを埋めることに努めてきました」

こうしたベンダーやクラウドサービスを提供する会社など、広く関係者を交えてのすり合わせも幾度となく行われています。

■CBDC 台帳の設計パターン



（注1）①：発行、②：払出、③・⑤：同一仲介機関内の移転、④：仲介機関を跨ぐ移転、⑥：受入、⑦：還収
（注2）パターン2において、払出（②）、仲介機関を跨ぐ移転（④）、受入（⑥）は、中央銀行台帳と仲介機関台帳の口座残高が同時に増減する。同一仲介機関内の移転（③、⑤）の動きは、中央銀行台帳に反映されない。

「仮想サーバー上での新たな決済サービスの実験という日本銀行にとって新しい試みですが、実際の日々の業務はむしろ地道でアナログな部分も多い。技術的な知識にも増して、聞く、伝えるコミュニケーション能力の大切さを実感しています」

新たな世界に柔軟に対応するチームの魅力と個々の努力

実証実験で測定値が得られた後は、机上での分析、検証が行われます。

「ミリ秒単位の世界における膨大なデータを解釈する際には結果を見るだけではなく、システムの構築に携わったベンダーから測定値の背景や意見を聞く作業が重要となります。一方で実験の結果をまとめた報告書を作成する時には、いかにわかりやすく読み手に伝えるかに苦心しました。実証実験結果を翻訳するような感覚で、読者との橋渡し役になるよう心掛けました」

そう話す企画役補佐の尾島麻由実さんは、チームに関する質問に対し笑顔になりました。

「このプロジェクトに携わる際に驚いたのは、『自走してください』という上司の言葉です。もちろん報告や情報の共有は必須ですが、やるべき作業が多いので、可能なら自分で判断していいと。用意された業務をこなせばOKではなく、それぞれに進む道を考えなければならないものの、打ち合わせの場では素朴な疑問や仮説をフラットに語りやすい雰囲気がありますね。新しいものを学ぶことに対して、柔軟な姿勢が共通しているのもこのチームの良さだと思っています」

現時点では、エンドユーザーの決済手段など細部まで具体的な検討は及んでいませんが、刻々と進化する技術をキャッチアップすることも必要だとか。

「ベンダーに作業してもらうだけでなく、自分たちでシステムの動作を確認したり、ログデータを分析したりすることが大切です。新しい技術を使ってみようという意識を常に持ち続けることが、CBDCが使われる未来のシステムをどのように構築していくかをイメージする上で大事だと思っています」

大切なのは今の過程を着実に未来に継いでいくこと

グループ長の山田さんによれば、フェーズ2終了後、必要と判断されれば、民間事業者や消費者が実地で参加するパイロット実験の実施が検討されるとのこと。

「デジタル通貨分科会への参加者が回を追って増えるなど、CBDCに対する皆さんの関心の高まりを実感しています。多くの方のお力添えをいただきながらの作業は今後も続き、将来的にはさまざまなIT関連企業を含め、より幅広い方々のご協力を得ることにもなるでしょう。まだ始まったばかりのこのプロジェクトを先へとつなげるためには、実証実験の成果だけではなく、内外の関係者がどのような議論を行っているか、そして日本銀行が何を重要だと考えているのかということを丁寧に説明していくことも大切だと思っています」

＊＊＊＊＊＊

山田さんをはじめデジタル通貨グループの皆さんから伝わってきたのは、未知への世界に挑む先駆的な業務に対してやりがいや面白さを感じていることでした。果たして、未来はどうなるのか。グループのチャレンジは、この先も続きます。

（肩書などは二〇二二年四月初時点の情報をもとに記載）

■ 2022年4月「概念実証フェーズ1」結果報告書を公表

日本銀行のレポートから

日本銀行は、金融システムの安定性を評価するとともに、安定確保に向けた課題について関係者とのコミュニケーションを深めることを目的として、金融システムレポートを年２回公表しています。本レポートの分析結果は、日本銀行の金融システムの安定確保のための施策立案や、考査・モニタリング等を通じた金融機関への指導・助言に活用しています。また、国際的な規制・監督・脆弱性評価に関する議論にも役立てています。金融政策運営面でも、マクロ的な金融システムの安定性評価を、中長期的な視点も含めた経済・物価動向のリスク評価を行ううえで重要な要素の一つとしています。

＊全文は日本銀行ホームページに掲載されています。https://www.boj.or.jp/research/brp/fsr/index.htm/

「金融システムレポート」

―二〇二二年四月―

国内外の経済・金融面で新型コロナウイルス感染症の影響が続くもとでも、わが国の金融システムは、全体として安定性を維持している。感染症の影響が大きい企業の収益に弱さがみられるが、金融機関の経営体力が総じて充実しているもとで、政策対応が効果を発揮し、金融仲介機能は円滑に発揮されている。金融市場では、米欧の金融緩和の縮小やウクライナ情勢が意識されるなかで、神経質な動きとなっている。

こうしたもと、わが国の金融システムの安定を確保していく観点から、注意すべきリスクは、①感染症拡大による国内貸出の信用面のリスク、②国際金融市場の調整など、グローバルな経済・金融面のショックが波及するリスク、③感染症拡大以前からの脆弱性がもたらすリスクである。

①感染症拡大による国内貸出の信用面のリスク

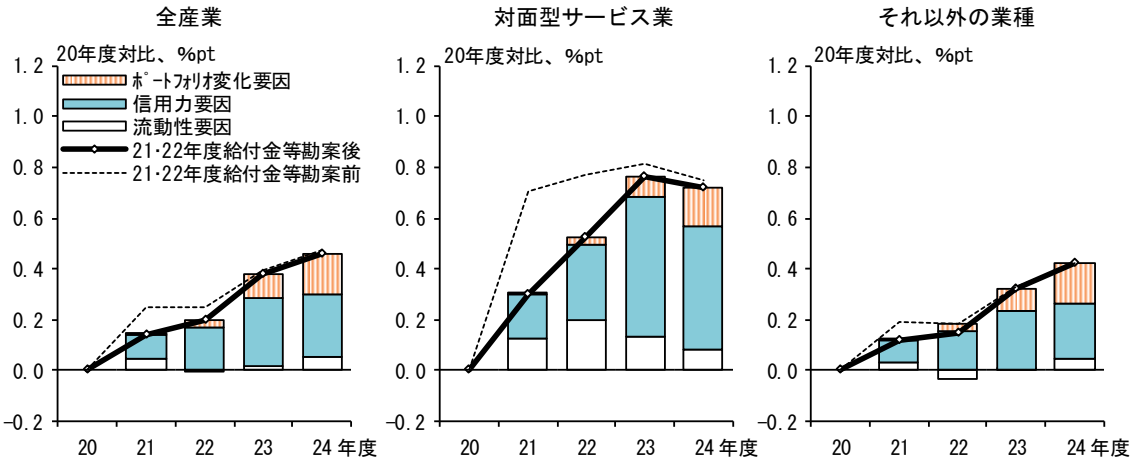
今回レポートでは、個社データ（約七五万社）を用いて、感染症拡大が中小企業のデフォルト率と、金融機関の信用コスト率に与える影響を、二〇二四年度までシミュレーション分析している。分析は、先行きの景気が市場参加者の平均的な見通しに沿って回復すると想定したうえで、足もとの経済情勢や、業種間・企業間の業績のばらつきを反映している。分析結果は、以下のとおりである。

・中小企業全体のデフォルト率は、二〇二一年度以降、手元資金が潤沢にある一方で、業種間・企業間の企業収益のばらつきが残るとの想定や二〇二三年度以降の実質無利子融資の利払い負担もあり、低位に抑制されていた二〇二〇年度の水準から小幅上昇する（次ページ図表1、左図）。対面型サービス業は、全体的に回復ペースが緩やかとの想定のもとで、手元資金の減少を補うために借入が増えるため、流動性、信用力双方の要因から大きめに上昇する（次ページ図表1、中図）。

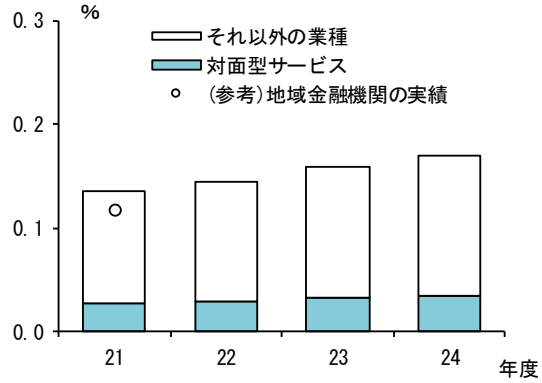
・全産業のデフォルト先の割合は、先行き徐々に高まるが、上昇幅は限定的で、二〇二四年度においても、抑制された水準にとどまる。ただし、対面型サービス業では、二〇二三年度にかけて足もとの水準から一段と上昇する（次ページ図表2）。

・中小企業向け貸出の信用コスト率は、二〇二四年度にかけて徐々に

図表１　デフォルト率変化幅の要因分解（全産業、業種別）

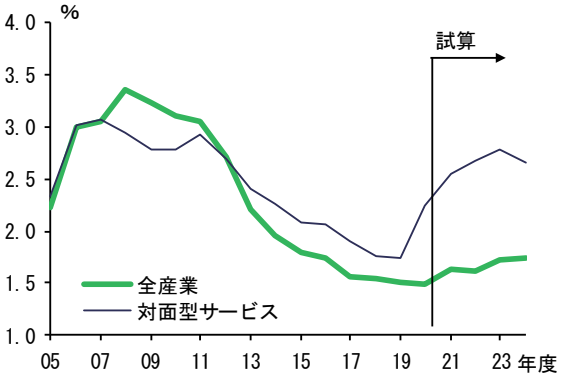


図表３　金融機関の信用コスト率
（中小企業向け与信ポートフォリオ）



（注）1. マーカーは、地域金融機関の直近３年間実績の平均値（地域銀行の2021年度は、2021年度上期を年率換算）。
2. 保全率は、地域金融機関の直近の実績値（６割程度）、未保全分に対する回収率は、６割を用いて試算。
（資料）日本銀行

図表２　デフォルト先割合の推移



（注）デフォルト先割合は、年度中にデフォルトした企業数を、当該年度初に存在する企業数で除して算出。
（資料）CRD 協会

上昇するが、対面型サービス業向けの与信割合が相対的に小さいこともあり、上昇幅は限定的である（図表３）。

こうした分析の定量的な含意については幅を持って解釈する必要があるが、マクロ的な企業収益の動向や企業収益の回復ペースを巡る業種間・企業間のばらつき等によっては、中期的に、企業のデフォルト率や金融機関の信用コスト率が上昇する可能性も示唆している。

②グローバルな経済・金融面のショックが波及するリスク

グローバルな経済・金融面のショックがわが国の金融機関の海外貸出と外貨資金調達に与える影響を分析した。

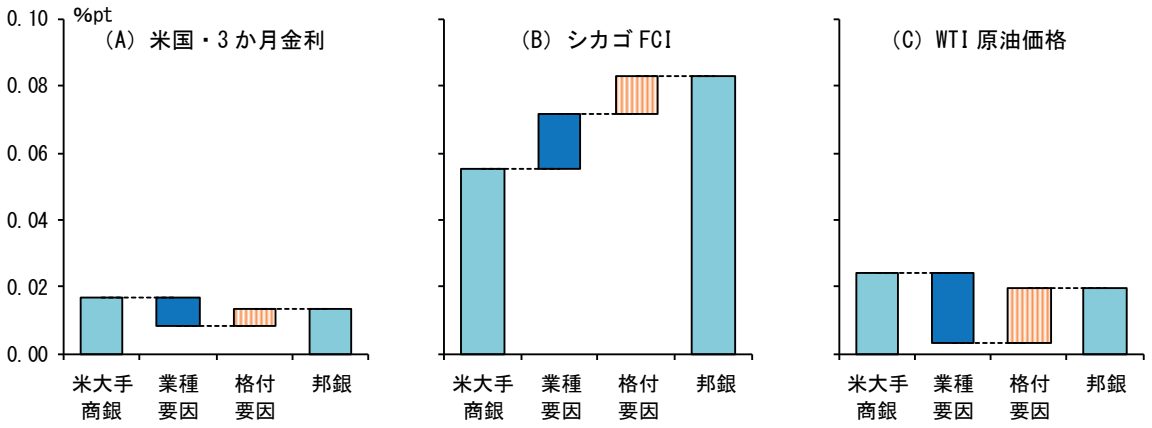
海外貸出の信用リスクについては、海外企業の格付データを用いて、（A）米国金利、（B）ＦＣＩ（注）、（C）原油価格の上昇に対するデフォルト率の反応を推計し、以下の結果を得た。

・三つのグローバルなリスクファクターは、Ｎｏｎ-ＩＧ（非投資適格企業）のデフォルト率をＩＧ（投資適格企業）対比で大きく上昇させるほか、業種間でも影響にばらつきがある。

・邦銀の海外貸出ポートフォリオは、米大手商銀対比、Ｎｏｎ-ＩＧ比率が高い。この点は、三つのショックに対して、邦銀が米大手商銀対

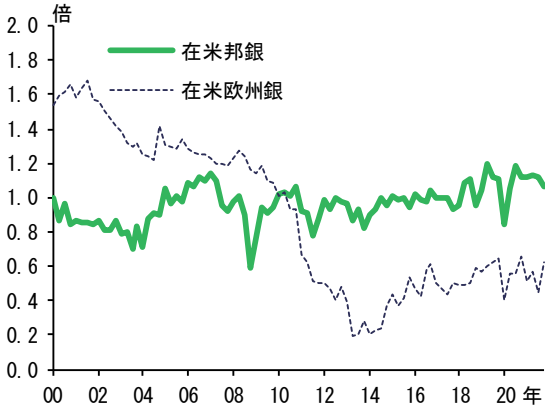
（注）ＦＣＩ（Financial Conditions Index）は、金融環境の広範な悪化の影響を捉える指標。ここでは、ＶＩＸや社債スプレッドから算出されるシカゴ連銀作成のＦＣＩを利用。

図表４　グローバルなリスクファクターの変化に対するデフォルト率の感応度



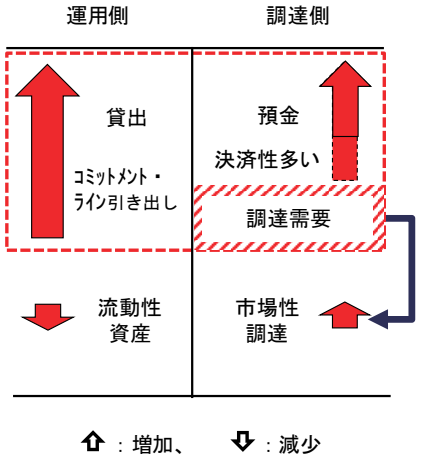
（注）各リスクファクターが１標準偏差変化した際の与信ポートフォリオの PD 変化幅（% pt）。与信ポートフォリオの PD 変化幅は、業種別× IG/Non-IG 別の PD 変化幅を、邦銀・米大手商銀の格付・業種別貸出構成比でウエイト付けして算出。
（資料）Moody's、各社開示資料、日本銀行

図表６　流動性リスク指標



（注）1. 流動性リスク指標＝（コミットメント・ライン＋市場性調達－流動性資産）／総資産（Acharya et al. 2021）
2. 流動性リスク指標は在米支店ベース。市場性調達は、在米支店で保有する大口定期預金、レポ調達、その他借入の合計、流動性資産は、在米支店で保有する現預金、米国債、レポの合計。
3. 直近は 2021年12月末。
（資料）Federal Reserve Bank of Chicago、FFIEC

図表５　流動性資産と決済性預金の役割



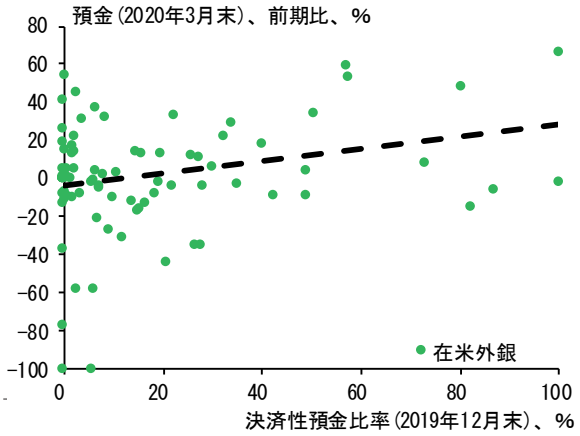
比、相対的に大きな影響を受ける要因となる。邦銀がより低格付の企業への貸出を増やす場合には、こうした影響をさらに受けやすくなる可能性にも留意が必要である。ただし、邦銀の貸出は電気・ガス業やエネルギー業の比率が高いなどの特徴がある。この業種構成の特徴が、米国金利と原油価格の上昇に対しては、米大手商銀対比、邦銀与信先のデフォルト率抑制に働き、デフォルト率悪化を米大手商銀並みにとどめる可能性が示唆される（図表４）。

外貨資金調達リスクについては、リーマンショック期や二〇二〇年三月の市場急変時の預金動向などを中心に分析している。分析結果は、以下のとおりである。

・金融環境が悪化する場合、在米外銀では、コミットメント・ラインの引き出しなどを背景に、外貨貸出が増えるもとで、外貨預金が限定的な増加に留まるか減少することから、資金調達に大きなストレスがかかる傾向がみられる（図表５）。こうしたコミットメント・ラインの引き出し可能性を勘案した流動性リスク指標でみると、在米邦銀は、在米欧州銀対比で、流動性リスクが高いことが示唆される（図表６）。

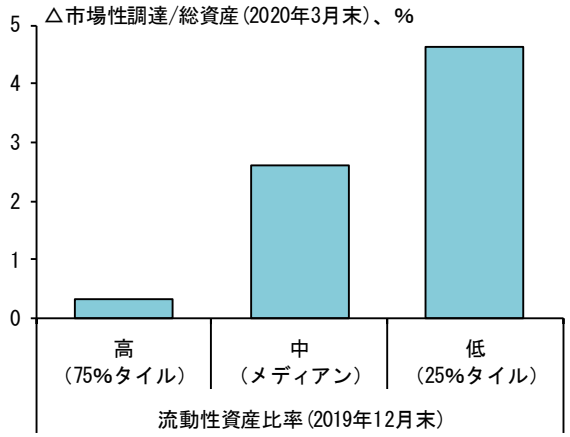
・二〇二〇年三月の市場急変時前後

図表８　決済性預金と預金の伸び率



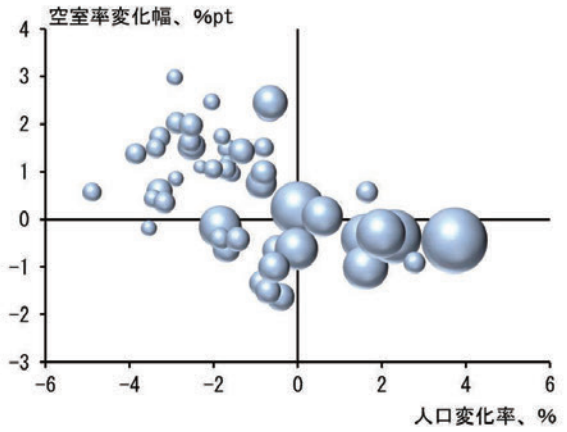
（注）「在米外銀」は在米支店の金融機関別集計値。預金は大口定期除く。回帰線の傾きは、5%水準で有意。
（資料）Federal Reserve Bank of Chicago

図表７　流動性資産と市場性調達



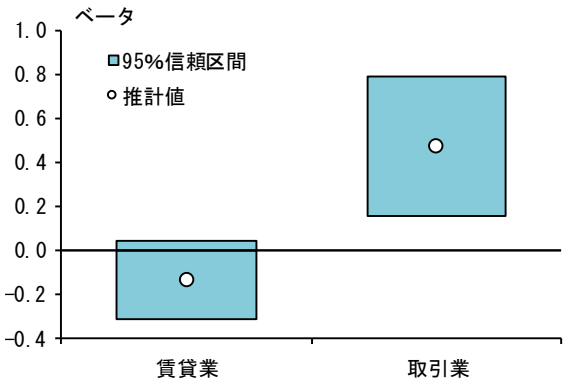
（注）在米外銀支店の市場性調達変化に、コミットメント・ラインと流動性資産比率を回帰した推計値。推計は2020年３月末時点。
（資料）Federal Reserve Bank of Chicago

図表 10　人口変化と空室率の関係



（注）1. バブルは都道府県ごとの人口規模を表す。
2.1998年から2018年の５年毎の変化の平均値。
3. 空室率は、共同住宅の空室戸 / 総戸数。
（資料）総務省「住宅・土地統計調査」「人口推計」

図表９　各業態 ROA の全産業 ROA との連動性



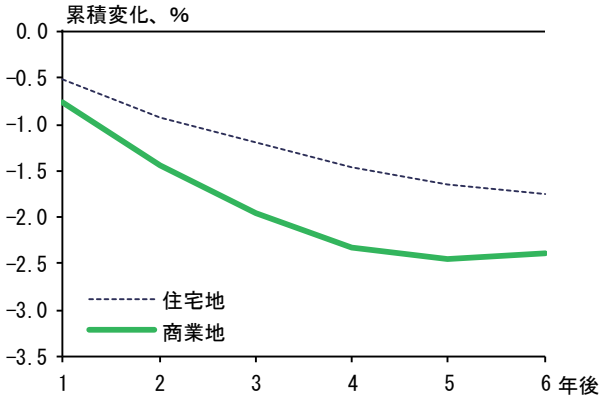
（注）賃貸業は、貸事務所業、土地賃貸業、貸家業。取引業は、建物売買業、土地売買業。
（資料）帝国データバンク

の在米外銀のデータを用いた分析からは、急変時前に、流動性資産保有が高いほど、あるいは決済性預金の比率が高いほど、急変時の資金調達面のストレスが軽減される可能性が示唆される（図表７、８）。邦銀は、外貨バランスシートを拡大するもとで、流動性資産の確保や決済性預金の拡充に取り組んでおり、こうした取り組みが、危機時における外貨資金調達の安定性を向上させる可能性が示唆される。

③感染症拡大以前からの脆弱性がもたらすリスク

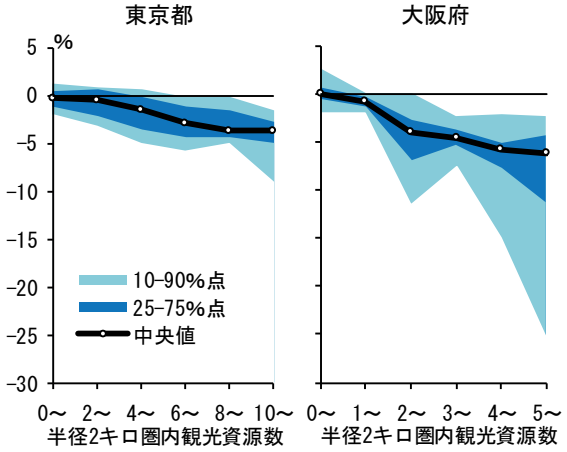
潜在成長率の低下などのもとで、わが国の金融機関は、趨勢的な収益性の低下圧力に直面しており、地域金融機関を中心に、ミドルリスク企業や不動産業向け貸出を積極化させてきた。今回レポートでは、近年、不動産業向け貸出を牽引している不動産賃貸業のリスク特性の整理に加えて、感染症拡大後の土地の収益構造やグローバルな要因の変化がわが国の不動産市況に与える影響を検証

図表 12　所得変化率１％ポイント下落時の地価への影響



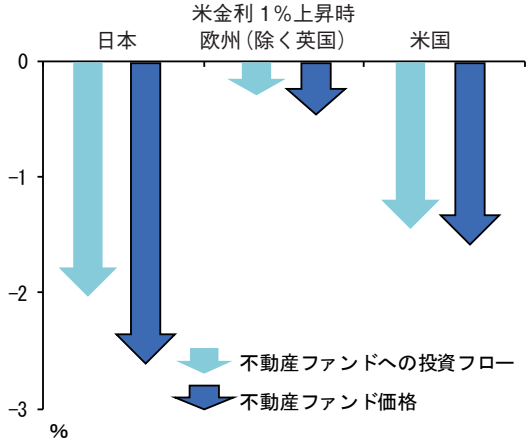
（注）推計期間は 2001年から 2021年、1人当たり課税所得の変化率の 1％ポイント下落に対する地価の反応。
（資料）国土交通省、総務省

図表 11　観光資源周辺の地価の変化



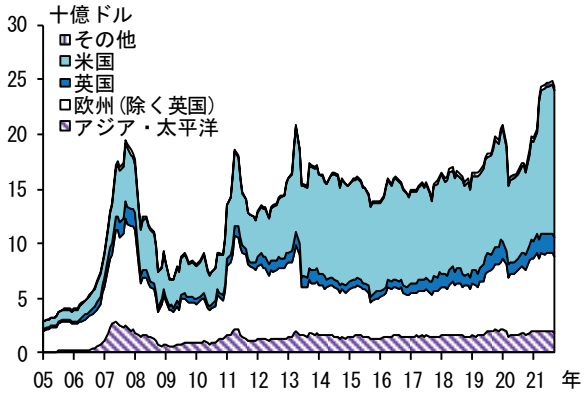
（注）公示地価の商業地・基準地点の位置情報をもとに、半径２キロ圏内の観光資源数で集計。2020年から 2022年までの累積変化率。
（資料）国土交通省「地価公示」「観光資源データ」

図表 14　グローバル・ショックに対する投資フロー・価格感応度



（注）矢印は推計された感応度の大きさを表す。「不動産ファンド価格」は、投資残高と投資フローの関係から算出。米金利は米 10年物国債金利。推計期間は 2003年1〜３月から 2021年1〜3月。
（資料）Federal Reserve Bank of Chicago、OECD、Refinitiv Lipper

図表 13　海外投資ファンドから日本の不動産ファンドへの投資残高



（注）不動産ファンド等に投資する投資ファンドの地域別ポートフォリオシェアを用いて、地域別の投資額を算出。「アジア・太平洋」は日本を除く。ファンド数は約 1.2 万。直近は 2021年９月。
（資料）Refinitiv Lipper

している。

・不動産賃貸業は、リーマンショック期においてデフォルト率が上昇した不動産取引業対比、ＲＯＡの変動が小さく、景気循環に左右されにくい（図表9）。もっとも、わが国全体でみれば人口減少が進む中で、人口減少が空室率上昇に結び付く可能性が都道府県レベルのデータから示唆される（図表10）。

・インバウンド需要の減少など、感染症拡大を受けて土地の収益構造が変化すれば、地価にも影響が及ぶリスクがある。感染症拡大前後で地価を比較すると、観光資源に近接する地点ほど下落が大きい傾向がある（図表11）。また、公示地価および市区町村別の所得データを用いて推計を行うと、恒常的な収益減少が持続的な地価の下落を生じさせる可能性が示唆される（図表12）。

・感染症拡大前から、Ｊ-ＲＥＩＴなどわが国の不動産ファンドへ、海外投資ファンドから資金が流入している（図表13）。こうした資金フローは、グローバルな金融・経

済の環境変化に感応的であり、米国金利の上昇などがみられる場合には、資金フローの減少や不動産ファンドの価格の下落が観察される（前ページ図表14）。

近年の不動産業向け貸出は、相対的に安定的で頑健とみられる不動産賃貸業向けが牽引している点でリーマンショック期とは異なる。もっとも、人口動態といった中長期的な構造変化が不動産賃貸業の収益力に与える影響や、感染症拡大後の土地の収益構造やグローバルな要因の変化が不動産市況に与える影響に注意していく必要がある。

マクロ・ストレステスト

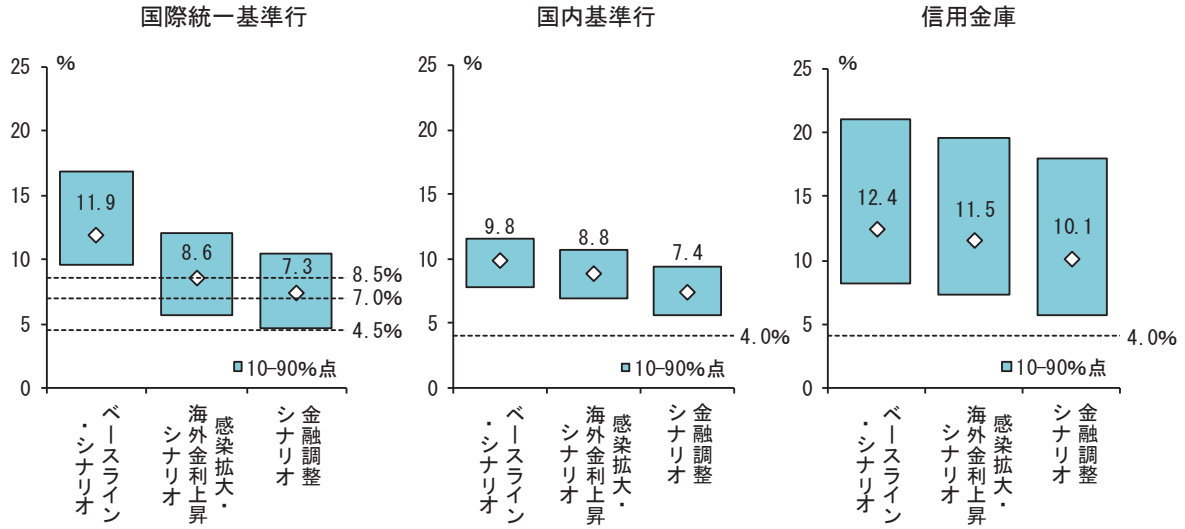
上述のリスク認識を踏まえ、二種類のダウンサイド・シナリオを用いてマクロ・ストレステストを行っている。シナリオの想定、分析結果は以下のとおりである（図表15）。

・「感染拡大・海外金利上昇シナリオ」：感染症の再拡大とそれに伴う供給制約等の影響から、内外の実体経済に負のショックが加わると共に、米国長期金利の上昇を契機として、資本流出圧力が生じやすい新興国を中心に実体経済が一段と下押しされるほか、国際金融市場にも調整が生じることを想定。信用コストの増加とコア業務純益の減少に加えて、株価や債券価格の下落による有価証券関連の損失などが下押しに作用するものの、すべての業態で、平均的には規制水準を上回る自己資本比率を確保する。

・「金融調整シナリオ」：リーマンショック期と同程度の大幅かつ急速な調整が国際金融市場で発生し、それが金融仲介活動への負の影響を通じ、内外経済にさらなる下押し圧力として作用することを想定。今回の最も厳しいシナリオ。自己資本比率は、信用コストの増加とコア業務純益の減少の一段の拡大に加え、有価証券関連の損失が膨らむことから、すべての業態で「感染拡大・海外金利上昇シナリオ」対比、低い水準となる。国際統一基準行では、CET1比率が資本バッファー比率（銀行により七・〇～八・五％）に抵触する水準まで低下する銀行が相応にある。

こうした分析結果から、「わが国の金融システムは、先行き、感染症再拡大と米国長期金利上昇が共に生じて実体経済と国際金融市場が調整する状況を想定しても、相応の頑健性を備えている。もっとも、仮に、国際金融市場が大幅かつ急速に調整する場合には、金融機関の経営体力が低下して金融仲介機能の円滑な発揮が妨げられ、実体経済の一段の下押し圧力として作用するリスクがある。」と評価している。

図表 15　自己資本比率（2024年度）



（注）1. 国際統一基準行は CET1 比率、国内基準行と信用金庫はコア資本比率（経過措置を含むベース）。
2. マーカーは業態計。

中央銀行デジタル通貨に関する実証実験（概念実証フェーズ2）を開始

▼日本銀行は、二〇二一年四月より、中央銀行デジタル通貨（CBDC）の基本的な機能や具備すべき特性が技術的に実現可能かどうかを検証するための実証実験（概念実証）を進めています。

▼このうち、CBDCの「基本機能」に関する検証を目的とする「概念実証フェーズ1」は、当初の予定どおり二〇二二年三月に終了し、四月から、CBDCにさまざまな「周辺機能」を付加して、その実現可能性や課題を検証する「概念実証フェーズ2」を開始しました。

▼概念実証フェーズ2では、CBDC台帳に、周辺機能の検証に必要な関連システムを追加して実験環境を構築します。そのうえで、主として、①決済の利便性向上に資する機能、②金融システムの安定確保のために必要となり得る機能（CBDCの利用制限など）、③仲介機関間・外部システムとの連携のための機能について、検証作業を進めていく予定です。

▼四月十三日には、「中央銀行デジタル通貨に関する連絡協議会」の第三回会合が開催されました。そこでは、①「概念実証フェーズ1」の結果、②「概念実証フェーズ2」の検証項目、③今後の検討課題などについて説明が行われ、参加者との意見交換が行われました。

▼また、五月十三日には、幅広い関係者に対する正確な情報発信と密接な意見交換のために、これまでの連絡協議会における説明や議論の内容を紹介した「中間整理」を公表しました。

「岡山支店開設一〇〇周年・ルネスホール建造一〇〇年特別講演会&演奏会」を開催

▼岡山支店は、四月一日に開設一〇〇周年を迎えました。これを記念して、四月十四日と十五日の二日間、旧岡山支店の建物（現在は音楽を中心とする多目的ホールとして親しまれているルネスホール）において、特別講演会&演奏会を開催しました。ご来場の皆さまには、「日銀おかやま一〇〇年の歩みとこれから」と題した講演の後、演奏（ピアノ演奏、「大正ロマン」歌のかずかず）を楽しんでいただきました。また、会場内には、「お札の重量体験」などの日本銀行広報グッズの展示に加え、「お金について学ぶコーナー」も設置しました。

ルネスホールの外観

特別講演会の様子

▼今回のイベントを通して、一〇〇年間支えてくださった地域の皆さまとの交流を深めることができました。支店ホームページ上に開設した「一〇〇周年記念特設ページ」に関連情報を掲載しておりますので、ご覧ください。

国際コンファランスをオンラインで開催

▼一九八三年以来、日本銀行は、金融研究所において国内外の著名な経済学者や中央銀

行関係者等を招いた国際コンファランスを開催しています。

開会挨拶を行う黒田東彦総裁　（撮影：野瀬勝一）

今年は、「New Dimensions and Frontiers in Central Banking」（中央銀行の迎える新たな局面とフロンティア）をテーマとして、五月二十五日～二十七日にオンラインで開催しました。

▼黒田東彦総裁の開会挨拶、ハーバード大学ケネス・ロゴフ教授による前川講演（金融研究所発足時〈一九八二年〉の前川春雄総裁の名を冠したスピーチ）に続き、海外でのインフレ急伸、不平等、気候変動、デジタル通貨、オートメーション（自動化）進展の含意など、中央銀行が直面する新たな局面とフロンティアについて活発な議論が展開されました。

「第一八回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」論文募集中

応募締切：九月三十日（金）

▼「日銀グランプリ」は、学生の皆さんを対象に開催する、金融・経済分野の論文・プレゼンテーションコンテストです。

二〇〇五年度から毎年開催しており、今年度も応募論文を募集中です。

▼テーマは「わが国の金融・経済への提言」です。応募に当たっては、日本銀行ホームページ上の募集要項をお読みください。多くの学生の皆さんからの斬新な提言をお待ちしております。

編集後記

■対談では、ドイツを中心に世界の舞台で活躍する指揮者の飯森範親氏と雨宮正佳副総裁が、音楽や指揮を切り口としながら、幅広いテーマについてお話をされています。コロナ禍が音楽に及ぼした影響、日本人の資質が西洋音楽にもたらし得る価値、さらには指揮者の果たす役割やその組織論的な解釈などいずれも興味深い内容となっています。

■インタビューでは、日本建築界の第一人者で、東京五輪のメイン会場となった国立競技場の設計にも携わられた隈研吾氏を取材しました。ご自身の目指される建築に辿（たど）り着くまでの試行錯誤を飾らない言葉で大いに語っていただいたほか、最後には、これからの時代にふさわしい建築についての示唆もいただきました。

■地域の底力では、岐阜県の恵那市を取り上げました。冒頭の恵那市長のお写真では、恵那市の公式キャラクターである「エーナ」のぬいぐるみがそばに飾られています。この「エーナ」の頭頂部分は恵那山を、服は棚田をイメージしているそうです。そして、よく見ると、目は恵那地方の特産品である栗の形をしています。気付くと誰かに伝えたくなるようなクオリティーですので、気になる方はぜひ振り返って確認してみてください。（上口）

［アンケート募集中］

「にちぎん」に関するご意見・ご感想は、アンケートよりお寄せください。
日本銀行のホームページからもご回答いただけます。

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文を PDF ファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。
（https://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/）

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ（https://www.boj.or.jp/）をご覧ください。

にちぎん　2022 年夏号
編集・発行人　上口洋司
発行　日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町 2-1-1
☎ 03-3277-1609

デザイン　株式会社市川事務所
印 刷　株式会社アイネット
禁無断転載

from New York

セントラルパークの木々と高層ビル群

ニューヨークの緑

ニューヨークの緑といえば、セントラルパークを思い浮かべる方も多いことでしょう。生い茂る木々と高層ビルの組み合わせは、ニューヨークの魅力の一つです。近年は、鉄道の路線跡地を活かし、緑地帯として整備されたハイラインと呼ばれる遊歩道も人気を集めています。

都市部から少し足を延ばせば、ニューヨーク州の広大な自然が広がっています。州の森林面積は日本の国土の約２割に匹敵します。州立公園や山々を抜ける散策道（トレイル）は緑と野生動物の宝庫で、普段は多忙なニューヨーカーたちにとっての安らぎの場です。

ニューヨークにはもう一つ、忘れてはならない緑（グリーン）があります。州西部のナイアガラの滝には、五大湖から豊富な水量＝グリーンエネルギーが注ぎ込まれています。主力のロバート・モーゼス水力発電所は州内トップクラスの発電量を誇ります。

ナイアガラの滝は、グリーンイノベーションの舞台でもありました。今から100年以上前の発電事業では、発明家トーマス・エジソンが、自ら開発した直流方式の利用を主張しました。これに対し、現在のクロアチアからの移民であるニコラ・テスラは、当時の技術にフィットした効率性の高い交流方式を提案し、エジソンとの電流戦争に競り勝ちました。その後、交流方式の実用性はナイアガラ事業で評価され、黎明（れいめい）期の電力普及を強く後押ししました。

ニューヨークは、新型コロナウイルスの影響を最も強く受けたエリアの一つです。しかし、街の緑は人々に癒やしと勇気を与え、デジタル技術を活用したwithコロナへの環境適応などと共に、困難に打ち克（か）つ力の源になったように感じます。ニューヨークの緑は、この街のresilience（復元力）を支える原動力でもあるのです。（日本銀行ニューヨーク事務所）

＊本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

ニューヨークに多数生息する野生の鹿

ナイアガラの豊富な水量

にちぎん　第一八巻　第二号　通巻七〇号　令和四年六月二十四日発行

にちぎん

ISSN 1880-0327